
傳く犬のために泣け

みくも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傳く犬のために泣け

【Nコード】

N5682J

【作者名】

みくも

【あらすじ】

敗戦国の王都で城内の下女として働くアイレ。

彼女は謎めいた白金の狼に出会う。

その事をきっかけに占領軍の指揮官、サディオと関わる事になるがアイレとサディオには互いに心に秘めた闇があり……。

(一) (前書き)

戦闘などにおける流血等の描写が含まれます。

ご一読頂ける場合は、どうぞご了承下さいますようお願い致します。

(一)

(一)

終わり、そして始まるという事だ。

だが国を失うと言うのは、こんなにのん気なものだったろうか。橋の上を忙しそうに人々が行き交い、野菜や穀物を満載にした馬車がそれらを掻き分けて走る。私は川原にうずくまったまま、少し遠いその光景をぼんやりと眺めた。

今回の戦は、我がトルトゥガリスタの完全降伏という形で終止符が打たれた。敵方であるインヴィオに王都を明け渡したのは、たった二日前の事だ。

私達は、国を失った。

それもまだ、日が浅い。

けれども、どうだ。街は今も活気に溢れ、人々の表情は明るかった。とてもじゃないが、彼らが亡国の民とは思えない。

しかしこれは、どこまでも緊張感のない国王が原因だ。

「何とかなる」が口癖の楽観主義者であると同時に、客観的にだけ見れば歴代の中でも優れた王なのだ。

だから民は、期待した。ロクに抵抗もせず、まるで客の様にインヴィオ軍を迎える王に。何か深い考えが、あるのだろうか。

だがあの男に、そんなものがあってたまるか。

それから、もう一つ。

城下が活気付いているのは、街に散らばった兵士達が宿屋や酒場に金を落としている事も大きい。

どうしてそうだったか、理由は単純。平和的に王都へ入ったインヴィオ軍が予想よりも大所帯で、城に納まり切らなかったのだ。

逆に言うと、城は城で定員以上の人間が詰め込まれていると言う事だ。すなわち、城内の下働きにとっては地獄の様な忙しさに見舞

われる状況を意味している。例えば、城の下女になってたった三日の私でさえも。

そう、私は忙しい。こんな所でのんびりと、市井の現状について考察している場合ではないのだ。

ならばさっさと用事を済ませて城に戻ればよさそうなものだが、そうも行かない。

元々、人と一緒に大量増殖した汚れ物が井戸近くの洗濯場だけでは処理し切れず、仕方なく山ほどのシーツを抱えて川原に下りてきたのだ。

普段ならしない。ここがポイント。

城のすぐ脇を流れる川ではあるが、城内には立派な井戸が幾つもある。だから誰も、わざわざ川原に下りたりしない。そのため道があるのかないのか解らない土手を、両手一杯に洗濯物を抱え、下りた。

案の定、足を挫いて今に至る。

地面に広がって余計に汚れたシーツの中で、動けなくなってから既に一時間近く経っている。その内、誰か私の不在に気が付くだろうと思っていたが、どうも期待は薄そうだ。

陽も傾き掛けて途方に暮れていた私の耳に、川原の砂利を踏む足音が聞こえた。

天の助けかと振り返る。と、そこにいたのは明らかにガラの悪い男達。

現在この王都を占拠するインヴィオ国軍は、その国民性か、末端の兵士までが驚くほどに礼儀正しい。洗濯物を抱えて歩いていたら、ドアを開けてくれるくらいだ。

ただし、それが通用するのは国軍兵士まで。

ざくざくと砂利を踏み締めて、すぐ傍に迫る男達を見上げた。人を見掛けで判断して申し訳ないが、このくたびれた鎧や剣は、どう見ても国軍兵士と言う出で立ちではない。

戦争があれば、戦力を増やすためにどこの国も傭兵を雇う。だから

らこの時代、女、特に若い娘は決して傭兵に近付かぬように教え込まれているものだ。戦争と略奪がワンセットと勘違いしている傭兵に、人間性は期待できない。中には例外もいるかも知れないが、残念ながら私は今までその例外には会った事がない。

男が一人、私の腕を掴む。不愉快だったが、それをどこか他人事のように感じた。

脳裏に、とぼけた顔の兄が浮かぶ。

「皆と一緒に逃げないのかい？」

この国が負けると決まった時、そう問う兄に私は答えた。

「ご安心を。命を惜しむつもりはありません」

「でも君、女の子だからねえ。ただ殺してくれるなら、親切だけだねえ」

のんびり口調の、物騒な言葉を思い出す。あれは、こう言う意味も含んでいたか。

腕を捉えて、ご丁寧に口まで塞いで、男達は私を手近な茂みに連れ込もうとする。これでは声を上げる事もできず、痛めた足を引き摺られるたび呻き声を洩らすのが精々だ。

どこかに国軍所属の兵士がいれば助けてくれるのだろうか、あいく周辺に自分達以外の人影は見当たらなかった。少し頸を巡らせば、橋にはまだ人通りが多い。しかし距離がある事と傾いた太陽が災いして、気付いて貰うのは無理そうだ。

一応、男達の手から逃れようと暴れながら、頭の中ではそんな事を冷静に考える。可愛げがないとは、物心が付いてから言われ続けた言葉だ。

しかし、これは拙い。何とか逃げなくてはと焦るが、相手は仮にも兵士。力で敵うはずがない。しかもこの痛めた足では走るどころか、歩けるかも怪しかった。残っているのは冷静さだけだったが、冷静に考えれば考えるほど状況は絶望的だ。

なす術もない中で、ある一瞬、空気が変わった。

——唸り声。

はっと息を呑む気配。

男達の意識が弾かれる様に私から離れ、一点に集中した。何事かと訝りながら視線でそれを辿り、私もまた息を呑む。

眼に飛び込んだできたのは、朱い狼。

燃える様な色の大きな獣が、すぐそこから真っ直ぐこちらに敵意を向けていた。鋭い牙を見せ付けて、地の底を這う様な唸り声を上げている。

こんなものを前にしたら、ちょっと動けない。恐いと感じる余裕もない。ああ、もう死ぬのだと、何だか納得してしまう。そんなふうに、気圧される何かがあった。

私との間は、わずかに三步。狼なら、一瞬で駆けられる距離だろう。

なのに、それはわざわざゆっくりと一步を踏み出した。警告の様に。

ジャリ、と。

鋭い爪が、川原の細かな石を搔く。その冷たげな音が耳に届くや、私は狼に向けて突き飛ばされた。

視界の端に、逃げて行く男達が見える。

ああ、囧か。

砂利の上に倒れながら、理解した。狼が私を食べてくれれば、その間に男達は逃げる事ができる。彼らはそう判断したに違いない。倒れた拍子に、痛めた部分を打ち付けたい。足全体に痺れる様な痛みを覚え、ついそのまま倒れ伏してしまいたくなった。

だが、乱れた呼吸に紛れ込む川原特有の石の匂いに、自分の状況を思い出す。慌てて顔を上げると、驚くほどすぐ傍に狼の顔があった。しかし私は恐いと思うより先に、またも圧倒されてしまった。獣の眼とは、どれもこんなに美しいのだろうか。

どこまでも深い青。なのに暗い訳ではなく、不思議に輝く深海の様な色をしている。

こちらを見詰め返す瞳の中に、思慮深い光が宿ってはいないか？

ふと、私はその体に触れてみたくなった。

理由ならある。燃える様だったその毛皮が、少し色を変化させた様に思われたからだ。それは何故かと、不思議でたまらない。

そっと手を伸ばすと、驚いた事に、狼がわずかに身を引いた。

すっかり好奇心をくすぐられた私は、何としても触りたくなくて再び手を伸ばした。一瞬、忘れていたのだ。膝を進めようとして、すぐに思い出す。挫いた足は、動かすべきではないと。

「うぎゃッ！」

踏まれた蛙の様な悲鳴を上げ、私は体勢を崩した。近距離だっただけに、避け様がない。例によって妙に醒めた頭の端で、自分に潰されるであろう狼を気の毒に思った。

だが、それは全くの杞憂と言うものだった。自分がどうなったのか理解する暇もなく、あっと思った頃には背中に細かな砂利の感触、胸に大きな前脚の重みを感じていた。

引き倒されたのだ。

獣に？

納得と疑問が同時に湧き上がり、そして消えた。いや、どうでもよくなった。と言うのが、恐らく正しい。

自分の体を踏み付けにする獣の姿を、私は真下から見上げている。そこまでの至近距離で、やっと毛色の秘密を知った。

大人の男ほどもある大きな狼は、その全身を美しく繊細な白金の毛で飾られていた。その輝きを持った白い毛皮に、燃える様な夕陽を受けて朱く色付いて見えたのだ。

先ほどよりも太陽は傾きを増し、光の色は褪せている。そのために、今の狼は夜気の滲み出した寂しげな色を帯びていた。どきどきと、自分の心臓が早鐘の様に鳴るのを感じる。

この胸を踏む狼の脚にも、それは伝わっているだろう。けれども、鼓動を早めるのは恐怖ではなかった。最も近い言葉を探せば、これはきつと恋慕に似ている。

……残念だ。

恐らく私は、このまま死ぬ。この狼の鋭い牙に、喉を裂かれて。なのに、もっと見ていたい。

夕陽を受けて輝く姿は美しく、夜気に染まる姿も愛しい。けれども例えば、これが月の光に浮かび上がる姿は、神々しいほどに違いない。

見てみたかった。

それだけが、残念だ。

白金の毛先を指の腹に感じながら、そっと、しかし素早く腕を伸ばす。刹那、深い海の様な狼の瞳が、心を映してわずかに揺れた。構わずぎゅっと頸に抱き付き、ふかふかの胸元に顔を埋める。

意外な事に、鼻腔をくすぐる匂いはまるで獣らしくなかった。香水とまでは行かないが、昼下がりに紅茶を嗜む貴族に似た香りをさせていたのだ。

この体験に、私は胸が詰まった。触れる事すら到底許されないほど峻厳な生き物の、胸の中にいる。それがただただ、嬉しかった。この獣になら、殺されても構わない。

偽りなく、そう思った。

——だが私は、すぐに激しい自己嫌悪に襲われる事になる。

逃げ出したのだ。

私が、ではない。

狼が、だ。

ほんの少しの間抱き付いたまままでいたのだが、ある瞬間、狼はやつと正気にでも返った様に私を振り払った。そして二、三步飛びずさり、しばらくこちらを警戒した後、くるりと踵を返して一目散に走り去ってしまった。

これには酷く、衝撃を受ける。

何故なら、走り去る姿はまるで、しつこい女から逃げ出す男そのものに見えたからだ。この場合、しつこい女は間違いなく私だ。

立ち直る自信は、ちよつとない。

(一)

(一)

この時点で既に、私はあらゆる危機を切り抜けたと言える。
だが実は当初の問題、川原で遭難している状況だけはまだ脱せず
にいたのだ。

足を挫き、ガラの悪そうな男達に襲われかけ、獣を前に死を覚悟
した。獣がどんなつもりだったか、真意は判じられないが。

とにかく、これだけの事があったのだ。

残るはもう、助けられるくらいのものだろう。そう油断した自分
を、責めるつもりはない。

「……動けないのか」

「はいっ、すいません」

その人物を見上げながら、私は反射的に謝罪した。妙な緊張に、
胃が縮む。

やっと見付けて貰えたのが、この人とは……。

西の空は、まだ仄かに明るい。だが太陽は地面の下に隠れてしま
い、辺りは薄闇の中にある。そのため殆ど輪郭だけの影の塊が動き、
細かな砂利に片膝を突いた。

うずくまる私の真横まで下りてきて、やっと見えたその顔は不機
嫌そうに厳めしい。しかし、この人の機嫌が本当に悪いのかどうか、
私には判断が付かなかった。二日前、インヴィオ軍を率いてこの城
に入った時から、始終こんな顔だからだ。

「持ち上げるぞ」

「えっ？」

男は短く言っ肩に手を回し、もう一方の腕で膝裏をすくい上げ
る。そうして、私を抱えて一気に立ち上がった。

その振動はわずかに揺られた程度だったが、痛めた足には痺れる

様な痛みが走る。思わず身を竦め、男の肩に掛かる青い衣を握り締めた。

さすがに腕の中の事だから、自分がしがみ付かれていると解っただろう。何となく居心地悪げな顔に見えたが、咎めはしない。彼はそのまま、黙々と城に向って足を進めた。

足に痛みはあったが、腕の中に慣れてくれば余裕も出る。

そっと視線を上げれば、すぐそこに横顔があるのだ。やがて私は、自分を抱えた人物への興味を押さえ切れなくなった。

この人を、サディオ・ラブレと言う。

我が国の平定を一手に任された若き俊英で、王の血を引く者。そして武勇で名高いインヴィオ第二師団、師団長。

通称を、紺碧の盾。

この異名は、常にサディオが傍に置く側近兵に由来している。インヴィオ軍において、青に染めた革張りの鎧を着用するのは彼の側近五人だけだ。元はそれらを指したものが、いつしか主のサディオを示す名に転じた。

もちろん、武功には事欠かない。私の知る限り、紺碧の盾を打ち破った国はないはずだ。

しかもサディオは、インヴィオ現王の実子だ。

そんな身分にありながら、軍に飛び込んだ。しかも実際、稀有な豪傑なのだ。これほどの人物が、王の血筋から出るのは奇跡に近い。誰だって、少なからず興味をそえられるに違いない。だから実は、ずっと前からどんな男か見てみたかった。

密かな願いが叶った、二日前。

この城に入ったサディオは、その風貌で我が国の重臣たちにいきなり眉をひそめさせた。

その最たる要因が、頬の辺りで毛先を揺らすこの銀髪だ。

色が問題なのではない。民草の短髪は珍しくないが、貴族や王族など身分ある男性は基本的に長髪だ。サディオの様に結えないほどに切った頭は、品がないと年寄り連中には評判が悪い。

だが個人的な事を言えば、私は、なるほど、と思った。今もそうだが動いたびに揺れる毛先が輝いて、まるで光に包まれている様だ。これは、見る者の眼を奪う。インヴィオの軍人達に絶大な支持を受ける秘密は、この神秘性にもあるのではないかと納得した。

けれども同時に、私はこの人が苦手だとも思った。

敵国の人間を何も好きになる必要はないのだが、どうも、サディオの持つ王族然とした雰囲気には慣れないのだ。近寄り難いと言うよりも、傍に寄るのを許さない様な。

もちろん、我がトルトゥガリスタにも王族はいる。だが私の知るそれらの人々はどこまでも大らかで、尽くユルかった。

遥かな高みから余人をじっと見下ろす様な、そんな王族には免疫がない。

――……そのはず、だったのに。

どうして、こんな事になるのだろう。

二人分の体重を載せたサディオの靴音が、石畳に響く。しばらく前に幾つかの戸を潜り、中庭を抜けた。ここはすでに城内だ。だが私を抱えた人は、一向に足を止める気配すらない。

それも建物には入らず、庭に面した回廊をぐるりと回る。これではどこへ行くにも遠回りになるが、もしかすると人目を避けるためかと思ひ当たる。

それはこちらにも、有り難い配慮だ。雑用係と大差ない下女が、一軍を率いる師団長に抱きかかえられている。この状況を、どう説明しろと言うのか。改めてそれに気付くと、つい周囲に人目はないかと窺ってしまう。

城内とは言え、人の少ない場所は灯される明りも少ない。回廊は長いが、灯火はわずかにその角ごとに置かれているだけだ。だから姿を隠すつもりなら、それはた易いに違いない。

腕の中でそわそわし始めた私には全く構おうとせず、硬い足音は変化なく進む。明りの一つが近付き、そして過ぎた。

刹那、サディオの肩に掛かる衣の下で、銀色の鎧に反射した光が

私の眼を射る。

はっとした。

そこに、狼を象る紋章が刻み込まれていたからだ。

この瞬間、何かが繋がった気がした。

「サディオ様、あの狼はあなたがお連れになったのですか？」

疑問が、口について出る。そうしてしまうと、これが本当の様な気になった。

うっかりしていた。白い狼は、インヴィオ王家の紋章だ。そしてかの国の兵士は必ず、守り神として白や銀色で象った狼を身に付けている。だから師団長ほどの人なら、本物の白い狼を戦場に從えていても不思議はないのではないか。

サディオは足を止め、私を見詰めた。それから何か得心した様に一人頷き、顔を背けて前を向いた。

「おかしな女だと思ったが……。それで、あんな事ができたのか。獣でも、人に慣れているなら害はないと？」

「い……いつから見たらしたんですか」

衝動のまま狼に抱き付いた姿を、見られていたらしい。それを思うと、私は無性に恥ずかしくなった。頬が熱い。慌てて、しどろもどろの言い訳をする。

「あれは、違います。あの時は、本当に……。あんな綺麗なものになら、命を取られても構わないと思ったのです」

全てを奪われてしまいたかった。

こんな感情があるのだと、初めて知る。

あの白金に輝く美しい獣に、喉笛を引き裂かれて死んでしまった。あの生き物の鼓動と共に、血肉となって命になりたい。

本当に、そう思ったのだ。

歩き出そうとしていた足が、再び止まる。今度は、驚きを滲ませた眼で見詰められた。

「……どうかしている」

「すみません……」

結局、狼については何も教えて貰えなかった。

サディオがいつも通りのしかめ面で、黙々と前を見詰めて歩き出したからだ。その様子に話し掛けるのをためらう内に、目的地らしい部屋に到着した。

「これは、お珍しい」

「黙れ」

そんな会話で私達を迎え入れてくれたのは、インヴィオに従軍するネウト医師だった。

医師と言うと、陽に当らないひよろひよろのもやしか、それとも運動不足でたつぷりと脂肪に包まれた丸いお腹の印象しかない。

が、ネウトはそのどちらでもなかった。細身ではあるが思いの他に上背があり、サディオの腕から受け取った私を実に柔らかな動作で診察台に置いた。

少しひやりとした手で足を診て、やがて人好きのする笑顔をこちらに向ける。

「足首を捻挫している様ですが、骨は大丈夫でしょう。貼り薬をお出ししましょうね」

「すみません」

「構いませんよ。いつも、むさくるしい軍人ばかりに囲まれていますからね。女性がいて下さると、それだけで楽しいですし」

くすくすと笑って、医師は同意を求める様にサディオへと視線を移した。

「師団長の特別な方ともなれば、尚更です」

ド天然。

生まれて初めて兄以外の人間に、この言葉を悪態の意味で思い浮かべた。

案の定、サディオからは刺す様な冷たい空気が漂っている。そして音もなくネウトに忍び寄ったかと思うと、その胸倉を掴んで低く脅した。

「誤解だ。広めるなよ」

「えー、誤解って。そうかな？　これが特別じゃなくて、何なんだい？」

私はかなり意外な心持ちで、この光景を見た。

後で知った事だが、ネウト医師はサディオとは父方の従兄弟と言う関係になるそうだ。つまり限りなく、王族に近い。実はこの事実を知るまで、少し彼の命を心配した。こう言った慣れ合いを、許す相手だとは思えなかったからだ。

だがこの認識は、すぐに揺らぐ。

「ネウト先生、賄い手伝ってたら指切っ……」

「サディオが女の子を抱いてくるなんて、奇跡的じゃないか？」

第三の男が一人、無遠慮に戸を開ける。不服げなネウトが、サディオに問い掛けた正にそのタイミングで。

まるで雷に撃たれた様にその場で立ち尽くした兵士は、胸の辺りを狼の形に染め抜いた青い鎧を身に付けていた。では彼は、サディオの側近なのだろう。

次の瞬間、師団長の傍に控える精鋭に相応しく、厳しい訓練を思わせる無駄のない動きで兵士は素早く部屋を飛び出した。サディオですら、それを止める事は叶わない。

「待てっ、ギサンテ！」

主の制止を背中で聞きながら、ギサンテと呼ばれた兵士は叫ぶ。

「事件だ！」

完全に笑いを含んだその声は、尾ひれを付けながら瞬く間に城内を駆け巡ったそうだ。

(三)

(三)

下女の部屋は狭く、粗末だ。城内に部屋を与えられているだけ、まだいい方だとは言われているが。

その粗末な私の部屋は今、大量の祝いの品で埋め尽くされようとしている。あろう事か、療養する私のベッドまで浸食しかねない勢いで。

「狭いねえ、この部屋は。もっと広い部屋に移ればいいのに」

「一人部屋ですから、悪くないですよ」

「でもその内、この荷物に潰されるんじゃないかねえ」

美しく飾られたそれらの贈り物といい勝負で、この部屋に全くそぐわない男がのんびりと言う。

そうしながら、ついでの様に積み上げた贈り物を突く。バランスを崩したそれらは、ベッドの足元に腰掛けた元凶へと倒れ込む様にシーツの上に散らばった。

「陛下、暇なんですね？」

転がる箱から痛めた足を庇いながら、問う。すると上等の絹に包まれた男は、箱のぶつかった頭を押さえ、幼子の様に笑った。

「幽閉って、詰まらないものだねえ」

「国を潰しておいて、何の娯楽を期待しているんですか？ アサレア陛下」

あはは、きつーい。などと、全く頓着しないアサレアの向こうで、戸の傍に立つ監視役が眼を丸くしている。

現在の立場は微妙だが、仮にも自国の王にこの態度と言うのが信じられないのだろう。

当の本人は、全く気にしていない様だが。

「いやあ、だからねえ。楽しくって！ 評判だよ。君、サディオ師

団長をたらしこんだんだって？」

「……どう言う、尾ひれの付き方をしたんですかね？」

私はアサレアではなく、監視役の兵士に向けて言った。身に着けた青い鎧は同じだが、今ここにいるのは昨日、事件だと叫んでこの状況を招いたギサンテとは別の男だ。名前をパパと言うらしい。

「自分が聞いた話では、この国の女性のお腹には既に子供がいる事になっていましたね」

「おめでたい話だねえ。アイレ、本当かい？」

「だとしたら、私は今回の戦が始まる前からインヴィオと通じている事になりますね」

実に楽しいアサレアを横目に、私は頭を抱えた。

サディオがこの城に入ったのは、三日前だ。幾ら何でもこれは嘘だと、何故誰も言い出さないのか解らない。

……いや、信じたいのだろうか。少なくともこの国の人間は。

部屋の中を埋め尽くす贈り物は、インヴィオの兵士が面白がって届けた物もあるが、ほぼトルトゥガリストの臣からだ。現在国に残っているのは、それなりの地位と覚悟の者ばかりだ。

それほどの覚悟を持った者達は、どう感じたのだろう。

サディオと私の間に、別ちがたい縁ができたと聞いて。

「いやあ、でも、安泰だねえ。本当に結婚でもしちゃったら。師団長さんて、インヴィオ王家の人でしょう？ そんな人と、うちの……あの、怒ってる？」

私の視線に気が付いて、アサレアが言葉を濁らせる。

この場に監視役が同席しているのを、忘れていたのではないだろうか。危ない感じだった。これには冷たい視線で刺す様に、答える。「怒ってません。ですが、もし他の方達もそんなふうに期待しておられるとしたら、私は自分の迂闊さが許せないだけです」

「本当の話にはなりませんか？」

こう口を挟んだのはパパだ。私は驚いて、そちらを見た。

「本当にしたいのですか？ 負けたこちらはともかく、インヴィオ

に得はないでしょう？」

「自分はただの軍人なので、政治は解りません。ただ師団長は、あ
あ言う方ですから」

「……婚期の遅れを、心配してらっしゃる……？」

恐る恐るそう問うと、横でアサレアが噴き出した。パパは困った
様に、少し笑う。そうすると、酷く印象が和らぐのを知った。

言葉少なで、ちょっと離れた所から全体を見ている様な。パパと
言う兵士はそんな雰囲気を持っていたが、サディオの事は大事にし
ているらしい。

きつとこんなふうに、あの人は部下達から慕われているのだろう。
なのに、どうしてだろう。

頭に浮かぶサディオの姿は、いつもどこか、何かを拒絶している
かの様だ。

それでも埋められない孤独があるのだと。あの人の瞳は。あの人
の背中。あの人の、自らを顧みない戦い方は。語っている。

インヴィオはすぐ隣の国だが、異国とは遠いものだ。隣国の戦況
は噂の様に耳にして、それだけでしか知らない。なのに思う。紺碧
の盾は、命を惜しみはしないのかと。

三万近い敵兵相手に、たった五百の騎兵を率いて自ら斬り込んだ
のは有名な逸話だ。

よく言えば勇猛、裏を返せば無謀。それに付き合う部下も部下だ
と思っていたが、放っておいたら、本当に死んでしまうのではない
か。実物を見て間もない私でさえ、そう思う。ならば彼を慕う周囲
の人間は、命懸けにもなるだろう。

なのに、罪深い。

そんなふうに大事にされて、なのに満たされはしないのだ。

どれだけ大事にされても、どんなに多くの人間に囲まれていても。
この胸の奥底に空いた穴は、埋められはしない。

そして罪深い孤独を知れば知るほど、何も大事になどできなくな
るのだ。

少しだけ、解る。もしも、サディオの胸にこの穴が空いているのだとしたら。

ふわり、と。真っ黒な穴の中に落ちかけた私を、白金の毛並みが柔らかに撫でた。

もちろん、想像に過ぎない。

だがその瞬間、洗い流された様に自分の魂が綺麗に、軽くなったのを感じた。

私はいつの間にか握り締めたシーツを離し、パパを見上げた。尋ねたかった。あの狼は、どこにいるのかと。どう言う理由でここにいて、会う事はできないのかと。

サディオの側近ならば、知っているだろうか。

「何か？」

「――いえ……」

訊きたかったが、思い止まった。

何故知りたいのかと問われたら、きっと巧く答えられない。それに、と、アサレアを盗み見る。

私が狼に夢中などと知ったら、この人はきっと茶化す。この確信に、半分拗ねた気分になった。

今度診察を受ける時に、ネウト医師にでも訊いてみよう。一人でそう決めて、頸を横に振って見せた。

それから散々ふざけた事を言い、更にもう二つ三つの贈り物の塔を崩して部屋を荒らしてからアサレアは去った。

どっと疲れたのかどうかは解らないが、いつの間にか寝入ってしまった。目が覚めた時は、すでに陽が傾き始めていた。

目覚めたままぼうっとしていると、控え目なノックが耳を打った。慌てて返事をする。そうか、きっとこのノックで目が覚めたのだ。

そっと開いたドアから、パパが顔を出す。

「女性の寝所に、一人で申し訳ない。アサレア陛下から頼まれたもので」

「陛下から？」

戸を開けたまま部屋に入って、パパが差し出したのは赤い表紙の本だった。

「退屈だろうからと」

「そうですか……。わざわざ、ありがとうございます」

パパは何か言いたげだったが、私から謝礼の言葉を受け取るとそのまま退室して行った。

改めて本に眼を落とすと、それは幼い頃に何度も読んだ覚えのある童話集だった。最後から二番目の話が残酷で、兄が読んでくれる時にはその腕にしがみ付きながら聞いた。

確かに懐かしきはあるが、今はもう開く事さえしなくなった本だ。どう言うつもりかと、ぱらぱらめくっているとしおりが膝の上に落ちた。

拾うと、指先で摘んだ紙片から香水の香りが広がった。これは、知っている。先ほどまでこのベッドの足元に腰掛けて、軽口を叩いていたアサレアの香りだ。

本としおりを胸に抱くと、その人を連想させる香りが私を包む。まるですぐ傍にいるかの様に。

知らず知らずにほっと息が零れ、そして苦笑した。

頼りにならないと思っていながら、私はいつもどこかでアサレアに支えられている。

どうしてだろうと、不思議でたまらない。

あんなにふざけているくせに、あの人はどうしようもなく私の兄なのだ。

(四)

(四)

幸い足は軽症だったので、一日休みを貰った後、ネウト医師から借りた杖を伴って職場復帰を果たした。

さすがにまだ屈んだり重い物を運ぶのは無理だったが、その心配は無用だった。

インヴィオの兵士が私を見掛けると、何かしら手を貸そうとしてくれるからだ。そして今、占領軍によって人口密度が飽和状態のこの城において、インヴィオ兵士のいない場所は皆無に近い。

結局全ての仕事を取られた私は、何もする事がなく、それどころか何だか日当たりのよい辺りに運ばれてしまった。快適過ぎて、眠い。でもここで寝たら、きっと負けだ。

人知れずそんな葛藤を繰り返しながら、ふらふら戦っていると肩を叩かれた。

「お暇そうですね」

「ラウレル卿！ 兄と一緒にみたいに言わないで下さい」

その人物を見上げて、眠気が一気に吹き飛んだ。嬉しさでだ。

ラウレル卿は王であるアサレアが最も信を置く人物であり、腹心の臣であり、父である先王が亡くなってから私にはその代わりでもあった。

そして昨日、例の噂に祝いの品を贈らなかった数少ない分別を持った人だ。

会えて嬉しい。だがしかし、と頸を傾げる。

我が国の重臣達はその多くが忠義とやらのために国に留まったが、この城に占領軍を迎え入れて以降はそれぞれが自邸での軟禁を命じられていたはずだ。ラウレル卿も例外ではない。

どうしてここにと問う前に、卿のゴツゴツした手が肩から移動し、

私の頭をわしゃわしゃと撫でた。そしてすぐ隣に座ると、白髪混じりの口髭の下で薄く笑って見せる。

「インヴィオの民は総じて親切ではあるが、あなたには特にそうですな」

悪戯っぽい眼で、こちらを覗き込む。

「これはお祝いを贈り損ねて、失敗したかも知れませんか」

「ラウレル卿まで、そんな戯言を……」

「何じゃ。やはり出鱈目か」

「当たり前でしょう」

素っ気無い返事に、卿はほっとした様な、がっかりした様な表情を見せる。この人までが信じ掛けるなんて、根も葉もないとは言え、噂の影響力とは侮れないものだ。

と、ラウレル卿がすつと寄って耳元に囁いた。

「まさかとは思うたが、姫のなさる事ですからな。万が一がないとも言えぬ」

これには、返す言葉に詰まった。現在は王の妹と言う立場で、王の娘であった頃ほど政治的に強い駒ではない。だが仮にも一国の姫なのだから、せめてもう少しだけでも大人しくしてくれと、乳母にはよく泣き付かれたものだ。

つまり、何をやらかしても不思議はない。ラウレルはそう言っている。しかも実際、今だって下女になりすましてここにいる。本来なら、国を明け渡す前に国外へ逃がされているはずだったのだ。

これは実に真つ当な指摘だったので、私は尖らせた唇で誰にも聞こえないくらいの反論をぶつぶつと零した。その頭の上に、追い討ちが掛けられる。

「しかし、悪い話でもありません。あなた次第で、トルトウガリスは属国ではなくインヴィオと同盟を結べるやも」

「まさか！ 同盟だなんて、冗談でしょう？」

強い非難の様になった。

軽口のつもりだっただろうか。当のラウレルは驚きを隠さず、私

の真意を見付けようとしてもする様にまじまじと視線を注ぐ。

頬でそれを感じたが、もう口を開く気にはなれなかった。

誰にも理解できない。だからこれは、二人だけの秘密だった。

駄目なのだ。それでは。

同盟では、兄と私の計画が狂ってしまう。

手近に放り出した杖を拾って立ち上がろうとすると、ラウレルがそれを助けた。

「ごめんなさい。用を思い出しました」

いつでも、見返りなく仕えてきた人なのだ。それを裏切った。忠節篤い臣への罪悪感に、この場に留まる事ができず、逃げた。

明るい庭を抜けて隠れる様に屋内に入ると、とにかく杖と足を動かす。俯いたまま幾つ目の角を曲がると、すぐそこに人がいた。

そうだと解ったのは、ぶつかってからだ。かなり強く衝突したはずだが、相手は微動だにせず、よろけた私をがっしり捉まえる余裕さえ見せた。

ああ、どうもすみません。と謝るべく顔を上げると、見覚えのある顔があった。

「あつ、ギサンテ！」

元凶！ と同義の名前を呼び捨てて、私は目の前の男を指さした。よくよく考えれば、相手は要職にある軍人だ。ただの下女だと思っている女に呼び捨てられて、無礼討ちとまでは言わなくても、腹を立てて当然の事態と言える。

だがギサンテは私をまっすぐに立たせると、自分と同じ鎧を身に着けて隣に並んだ男に話し掛けた。

「聞いたか？ コルロハ。未来の師団長夫人に覚えがめでたいぜ、オレ」

「とても好意的には見えないけどね」

瞬時に真理を見抜いたコルロハと言う男にこそ、私は好感を持ち掛けた。

が、続けて向けられた言葉には思わずがっくりと肩を落とす。

「サディオ師団長をお探しですか？」

「誤解です」

「じゃあ何の用だ？」

そう不思議がられて、やっと自分がどこにいるのかに思い当たった。

この通路にも屋根はあったが壁は片側にしかなく、それも途中から柱だけになっている。ほぼ屋外だ。無心で歩き回っている内に、建物を通り抜けてしまったらしい。

そして城のこちら側は、鍛練場になっている。本来は自国軍のための場所だが、今はインヴィオ兵の姿しかない。こんな所に自分からくれば、インヴィオ軍の誰かに用があると思われるが当然だ。

そして今は、タイミングが悪い。誰もが、私とサディオを関連付けたがっている。

一秒でも早く、この場を離れた方がいい。瞬時にそう判断したが、できない。私が倒れない様に支えたまま、ギサンテが手を離さないからだ。

「あの、離……」

「まあそう言うなよ。茶くらい出すぜえ」

「いえ、あの、結構です」

「そうだよギサンテ。待って貰うにしても、今日はちょっと時間が掛かるかも知れない」

いや、待ちません。用ありません。

「ごめんね。サディオ師団長は、ちょっと用事で席を外しているんです」

「別に待たすつもりじゃねーよ。ただオレと茶ア飲むんだよ。な？
な？　と言われても。」

ギサンテは元より、意外と話を聞いてないコルロハのペースに巻き込まれ、一瞬自分を見失いそうになる。

どうしよう、と思っていると、死角から伸びた手がギサンテの腕を掴み、私から引き剥がした。死角、つまり背後に誰がいる。

「何をしている」

振り返るより先に、答えが耳を打った。サディオの声だ。腕を掴まれ、悪戯がばれた子供の様なギサンテの隣から、コルロハが問う。

「まだ掛かると思ったのに。どうでした？ ラウレル卿は」

思わぬ所で知った名を耳にして、心臓が跳ねる。そうか。ラウレルが今日城にいたのは、サディオが呼んだためだったのか。

少しだけ、好奇心が頭をもたげる。わざわざ城から追い出した重臣を呼び付けるほどとは、何の用があったのだろう。

だが口を開くより、その姿を見ようとするより前に、私は背後から太い腕に抱え上げられていた。

ただし、これでは荷物扱いだ。サディオは胴に回した腕一本で、ジャガイモの袋でも運ぶ様に私を脇に抱えて歩き出した。

「えっ」

「サディオ師団長」

「黙れ」

反射的に声を上げたのは、私とコルロハだった。だがサディオの制止は、恐らくギサンテに向けられていた。本人が目の前にいた時はさすがに我慢していたらしいが、一つ目の角を曲がって私達の姿が見えなくなった途端、弾ける様な彼の爆笑が後を追ってきたからだ。

でも確かに、笑いたくなる気持ちも解る。

この人は、何がしたいんだろう。荷物扱いされながら窺うが、この角度からでは表情はよく解らない。

「あの。……あのう」

自分で歩けると言おうとして、口を噤む。手の中に杖がない。どうやら、置いてきてしまったらしい。

なら戻らなければと再び口を開き掛けたが、サディオは止める間もなく手近な部屋に滑り込み、後ろ手にドアを閉めてしまった。

官の執務室だったらしい。そう広くはない部屋中に、本や書類が

所狭しと積み上げられている。

「何をしていた」

本来なら、部屋の主が書類仕事を行なうための机だろう。その上の物を床に落とし、無理矢理作ったスペースに私を座らせる。

そして一言、こう問うたのだった。

私は返答に困る。別に何も、とは言い難い空気だったからだ。

「あいつらとは、話すな」

いつもの不機嫌そうな顔だ。表情と同じくらいに解り難いが、あいつらとは、側近達と言う意味だろう。

「話してません」

「口を利くなと言っている」

「はあ……」

これが、言いたかったのだろうか？

それきり口を閉じたまま、しかし部屋を出ようとしめない。私の右手にある窓際の壁に背中を預け、腕組みをしてこちらを見ているだけだ。

沈黙が下りると、自分の中にじわじわと不満が湧いてくるのを感じた。

私が誰と話そうと、自由ではないか。何故それを、勝手に制限されなくてはならないのだろう。不都合だと言うなら、自分が部下に命令でもすればいい。

「なら私は、あなたにお聞きするしかありません」

「何をだ」

「あの狼の事をです」

わざと言った。

事実、知りたい事ではあった。だが何となく、この話題は嫌がるだろうと予想していた。

そして思った通り、サディオの表情に苦いものが混ざる。

「何を拘わる。あんなものに」

「あんなもの？」

思わず聞き返す。言葉の中に、ただ話題にしたくない以上の、まるで吐き捨てるのに近い何かを感じ取ったからだ。

「白い狼は、インヴィオの守り神では？ それを、そんな……」

「あれは鎖に繋がれた、ただの犬だ」
思わず、息を呑んだ。

この言い種は、どうだろう。冷たいよりも、酷く寂しい。私は、踏み込んではいけない場所にまろび出た様な、そんな心細さを感じていた。

胸がざわつく。

「どうしてそんな仰り方をなさるのですか」

「事実だ」

「いいえ。あんなに美しい生き物はいません。例えあなたが主でも、その様に吐き捨ててよいはずはないのです」

ガタン、と。床が鳴った。

サディオの足が、何かに当たったらしい。だが彼はそれには構わず私の目の前に足を進め、机の両側に手を突いた。その重みに、机が軋む。

「あれに、命を取られても構わないと言ったな」

「はい」

あの獣を間近に見て、圧倒されながら私は心底そう思った。

「あれほど忌むしいものは、他にない。お前は、何も知らないだろう。知らぬから、そう言えるだけだ」

「……そうかも知れません」

鼻の先が触れそうなくらい、互いの顔が傍にある。黒だとばかり思っていたのに、今初めてその眼の色が深い青だと知った。

「ですが、初めてでした。あの白金の獣を見て、心奪われるとはこう言う事なのだと。私は、生まれて初めて知りました」

すぐそこにある男の顔が、歪む。けれどもそれは、どこか無防備なふうに思われた。

「俺は、あれが嫌いだ」

「そうですか。でも、私は好きです」

どうしてだか解らない。

解らないまま私は強く抱き締められて、唇に人の体温を感じていた。

(五)

(五)

「悪気はないんですよ、多分」

私の手を取って歩きながら、実に頼りないフォローをしたのはガルバと言う青い鎧の男だった。

ギサンテとコルロハが逃亡し、サディオがそれを追ってしまったので、私を主な職場である厨房まで送ろうと申し出たのだ。

大人しく、それに従う。正直な所は、一人になりたい気分だった。

キス。

自分がそれをされたのだと理解したのは、本能的に目の前の男をひっぱたいた後だった。

頭の中が茹だった様に熱を持って、どうしていいか解らない。そうした張本人のくせに、サディオはむしろ自分の方が戸惑っている様な顔で私を見た。

意外な事に、ある意味でこの場を救ったのは聞き覚えのある爆笑だった。

「ギサンテ！」

ドアではない。窓に向かってサディオが怒鳴ると、涙を浮かべて笑うギサンテがガラスの向うに姿を現した。

「本気なんですネ、サディオ師団長」

ついでに、サディオの背後からもそう声がする。ギクリと振り返る肩越しに、薄く開いたドアの隙間からコルロハの顔が覗くのが見えた。こちらの顔も笑っていたが、種類が違う。思わず、何か企んでいるに違いないと疑いたくなる、そんな人の悪い笑みだ。

ほんの一瞬。

どちらを先に捕らえるか、サディオが迷った。その一瞬を突いて、

二人は同時に、逆方向へと走り出す。こうされると、追う方は更にもう一瞬判断が遅れる。

結局サディオはギサンテを追い、窓から飛び出して行った。だが、追いつくのは難しいだろう。チームワークの勝利だ。

何だか嵐が去った様な気分ではうっとうしいと、開きつ放しになった戸口を背後を気にしながら通り掛かる男がいた。ガルバだ。

彼は執務室の机に置き去りにされた私を見付け、再び自分が今通ってきた方を振り返り、もう一度私を見て「ああ」と手を打つ。

何を納得したのかは解らないが、私を慎重に机から降ろした上、ちゃんと送らせてくれと言いつ出した。察するに、ここまでくる途中、逃亡するコルロハ辺りと擦れ違ったのに違いない。そして私を見付け、きつと身内が迷惑を掛けたと確信したのだろう。

何かがあったのには違いないが、それが何かは解らない。だからガルバは言葉少なで、どうしても自信がなさそうだった。

別に、サディオから「口を利くな」と言われた事を気にした訳ではないが、私も何となく黙り込んだ。

二人して口を開かず歩いていると、ほぼ同時に名前を呼ばれた。

「アイレ」

「ガルバ」

驚いてそちらを見ると、むしろ呼んだ方が驚いていた。

「どうした？」

と、強く問うのは眉をひそめたパパ。

「もう浮気かい？」

決め付けたのは、珍しく呆れ顔のアサレアだった。

「違います！」

悲鳴の様な声を上げて、ガルバは身の潔白を証明する様に私の手を振り払った。

これは予測できたので、バランスを失わずに済んだ。片足で立ちながら、二人に説明する。

「杖をなくしたので、送って下さっていたんですよ」

「何だ。詰まらない」

とても冗談に聞こえない口調で言いながら、アサレアはこちらに手を伸ばした。ちょうど手を繋ぐ格好で、それに掴まる。

と、パパがそれを見、わずかに眼を細めた気がした。

「……幽閉って、部屋で大人しくしているものではないんですか？」

「ん？ ああ。そうだね。でも、窓からラウレルの姿が見えたから。挨拶でも思ってる」

へらへら笑うアサレアを、複雑な気持ちで見る。いいのだろうか？ 挨拶と言っても、王と重臣が顔を合わせるなんて許されるのか。もの問いたげな私の視線を受けて、パパが短く息を吐く。

「存外、強引な人でね」

押し切られたらしい。

「陛下、わがままもいい加減に……」

「黒い風について、訊かれたそうだよ」
しまった。

とっさにそう思ったのは、電流の様なものが私の全身をくまなく撫でて行った後だ。

肩は震えなかったか？ 手は？ 唇は？ 眼にした者に不審を抱かす表情が、この顔を通り過ぎはしなかったか？

黒い風。

この名前は、私を少なからず動揺させた。

「予も、尋ねられた。サディオ殿がこの城に入ってすぐにね。よほど、関心があると見える」

「しかし、黒い風は……もう」

「我が国とは関わりない。だから災いが降りかからぬ様、願うばかりだよ」

「はい、陛下」

サディオが自ら王に尋ね、自邸に押し込めた重臣を呼び出してまで探ろうとしている。その事を覚えておくと、アサレアは釘を刺すためにこの話題に触れた様だった。

「アイレ殿も、黒い風をご存じか」

注意深く、パパが問う。返答次第では私にも、疑いの眼を向けねばならないと言うふうに。

アサレアが、賢君と呼ばれる理由。

それはわずかに十四歳で即位した少年が、以降十一年で国土をほぼ二倍にした事。

そして、それを実現させたのが黒い風だ。

兄が王座に着くと同時に現れた、トルトゥガリスタの天才軍師。

この十一年における我が国の治世と繁栄を、黒い風を抜きにして語る事はできない。

ただし、物事には必ずと言っていいほど表と裏があるものだ。それほどの功労者でありながら、黒い風の正体は味方でも片手で数えられる者しか知らない。明かせないのだ。

私はなるべく困って見える表情を選んで、顔に浮かべる。

「この国の民で、その呼び名を知らぬ者はいません」

「……なるほど」

とても納得したとは言い難い様子で、しかしパパはただ一言呟いただけだった。

夜になって、彼があっさり引き下がった訳を知る。

「一応、何をしてらっしゃるかお尋ねした方がいいですか？」

厨房の後片付けを手伝っていたら、すっかり夜更けになってしまった。

手燭に灯した蝋燭を頼りに、部屋へと戻る。だが自室の前まで辿り着くと、ドアの下から明りが漏れているのに気付いた。一人部屋だ。中には誰もいるはずがない。

逡巡。だが私が手足を動かすより先に、中からドアが開かれた。そこにいたのはガルバだ。その向こうにパパが立ち、私の粗末なベッドにはサディオが足を組んで腰掛けていた。

三人とも、それぞれに難しい顔をしている。思わず逃げ出したい気持ちになったが、彼らから逃げおおせるのは不可能だろう。

そして、先ほどの質問をぶつける事になったのだ。

「入れ」

サディオは問いに答えず、短く命じる。

つい、あなたの部屋ではないでしょう、と言いたくなる。しかしここは呑み込んで、大人しく従った。

手燭と杖をガルバに預け、促されるままサディオの隣に腰掛ける。その膝の上に赤い本が差し出された。昨日、アサレアがパパに言付けた童話集だ。

「読め」

「はい？」

二度目は言葉ではなく、胸元に本を押付けて催促された。赤い表紙と銀髪に飾られた顔を見比べて、知らず口からため息が零れる。読むしかなさそうだ。

「——もういい」

人魚が姿を消す辺りで、サディオは大きな手の平で本を隠した。取り上げたそれに自分でも少し眼を這わせた後、私を見る。視線が合うと急に距離が近付いた気がして、ドキリとした。

「アイレ。歳は幾つだ」

「二十一です」

答えると「そうか」と頷き、サディオは壁際に控える側近二人と眼で会話した。口を開いたのはパパだ。

「アサレア陛下の妹姫と、同じ歳ですね」

ああ、と思う。

そう言う話か。

「何が仰りたいのでしょうか」

「お前が本人なのだな、アルセ姫」

とぼけても無駄らしい。

サディオがやけに確信めいて本名を呼ぶものだから、そう思ってしまった。

肩から力が抜けて行く。そうやって初めて、余計な力が入ってい

たのだと気が付いた。

「困りましたね」

「否定はしないが、認めもしない？」

苦笑が漏れる。重ねて問う様子からすると、パパは明言させたいらしい。

「最初に私を疑ったのは、あなたですか？　パパ」

「そうです」

「何故？」

質問で返すと、どこか言い難そうに一瞬の空白を置く。それでも諦めた様に、本心と思えるものを吐き出した。

「そうであって欲しかった。気を付けておられたかも知れないが、あなたとアサレア陛下は親しげだ。恋人なら我々は苦しい選択を迫られるが、もし妹姫ならそうしなくていい」

「何だか、不純な動機ですね」

それではまるで、理由と行動の順序が逆だ。その結果を期待して、疑い始めるとは。

「いや、しかし切っ掛けはそれです」

「本？」

パパが示し、先ほど朗読を強要された童話集に視線が集まる。でも、どうしてこれが？

「アサレア陛下は当然の様に贈り、あなたも何でもないふうを受け取られた。だが貴族に仕える侍女ならともかく、文字の読める下女など、自分は知らない」

文字が読めたから、私が身分ある者だと考えたと言うのか。

余りの事に、私は呆気にと取られた。

「運の強い人ですね」

そしてやっと口から零れ出たのは、正直な感想だ。

本当に、運が強い。

(六)

(六)

インヴィオとトルトゥガリスタ、そしてもう一国のハルディンマゴを合わせて「大陸の楔」と呼ばれる。

これは山脈と海に挟まれ、大陸の少しくびれた辺りを塞ぐ形で三国が領土を持つためだ。事実、この大陸の楔が存在するために数々の列強も以北と以南に分けられる。楔の領土を侵してまで、戦を起こす国はないのだ。

楔の三国には、共通点がある。その繁栄が国土よりはむしろ、人によるものだという事だ。

インヴィオは神獣の国、ハルディンマゴは魔術師の国、そして我がトルトゥガリスタは知識の国と呼び替えられる。

これらの異称は、それぞれの国を实によく象徴していた。

インヴィオの民は信心深く、誇りと正義を重んじる。

ハルディンマゴはもう一つ、「死の商人」の側面を持ち、その高い技術を値段次第で誰にでも売った。

そして我が国は知識の国と呼ばれる通り、叡智に優れた人材を数多く輩出する国だ。

人は財産。

これは王座に刻まれた一文だが、トルトゥガリスタの法は正にこれに倣っている。

子供の労働を午前中は禁じ、読み書きと簡単な計算を教えるクラスは無料。ついでに昼食も国の予算で補われるので、貧しい家庭も子供を学校へ送り出す。

ちなみに識字率は、ほぼ百パーセント。

だからこの国では下女だろうが馬小屋の馬丁だろうが、文字は読めるのだ。

この事実、真っ青になったのはパパだ。
そりゃあ、そうだろう。疑いの根拠自体、誤解でしかないのだから。

運が強いとは、こう言う意味だ。

こちらに取っては命に関わりかねない秘密を、勘違いで看破されてしまった。

「またあっさりとバレたもんだねえ」

「あっさり認めたのは、兄上じゃありませんか。私は、ちゃんと曖昧にしましたよ」

私はアサレアのカップに紅茶を注ぎながら、ため息を零した。

その紅茶をソーサーごと差し出すと、兄は起き上がって受け取った。

部屋の隅に控えたガルバにもカップを示すが、これは首を横に振って辞退された。

眼を戻すと、アサレアはベッドの上で半身を起こし、座った格好になっていた。寝間着の肩に、上着を掛けてやる。

「ありがとう」

「治った途端にまた寝込んだら、笑い話にもなりませんよ」

「そう？　意外と笑えると思うけど」

もう随分いい様だが、この人は風邪をひいて寝込んでいたのだ。

この過ごし易い季節に。

アサレアは割合に体の弱い人で、よく寝込む。いつもならマヌケだ何だと罵ってやる所だが、今回は少し心配した。五日も面会謝絶にされていたからだ。

ちょうど私の身分がサディオ達にバレた、その翌日だ。朝には熱を出していて、ネウト医師の診察を受けた。

熱のせいかどうか。診察中の寝室に乗り込んだサディオに問い詰められ、アサレアは私を妹だと認めてしまったのだ。しかも、「妹をよろしく」とまで言ったらしい。

その後、アサレアはネウト医師の判断で隔離処置を取られた。理

由は感染力の強い風邪のため、だそうで、結局今日まで私も面会を許されなかった。

兄の寝室から閉め出されている間に、私は下女の部屋から王族として使用していた部屋に戻された。

同時に着る物も柔らかな絹のドレスへと改められたのだが、これには少し驚きを伴った。

下女でいたのはたった数日だったと言うのに、着慣れたはずのたつぷりと布を使ったドレスの重さには閉口させられた。肌触りだけでなくそう言った面も、下女の本綿スカートとは比べものにならないのだと知った。

そうして忙しく、戸惑っている内に時間が過ぎた。

最初は、もちろん腹を立てたのだ。

こんな重大な秘密を呆気なく認めるとは、どう言うつもりかと。当然、顔を見たら文句を言うつもりでいた。だがその機会は今中々得られず、病気だと聞かされたまま五日も会わせて貰えない。

これはさすがに、心配になる。

今日になっていざ顔を見たら、お元気そうで何よりですとしか言えなかった。

つまり、五日の間にすっかり頭が冷やされてしまって、怒るタイミングを逃したのだ。もしかするとこの面会謝絶はアサレアの計略だったのではないかと、今は考える。

ベッドの傍に椅子を寄せ、兄に文句を言いながら紅茶を飲んでいるとお客がきた。

「邪魔か」

「いいえ、まさか。サディオ殿も、紅茶をいかがですか？」

アサレアが空いた席を示して誘うと、サディオは携えた剣を椅子の横に立てかけ、腰を下ろした。お茶を用意するために立ち上がり、私はふと頸を傾げた。いいのだろうか。

「私がお淹れして、宜しいんですか？」

「毒を盛る気があるか？」

すぐに意図は通じたらしく、逆に質問で返された。

ある、とは言えない。ない、と言うのは、しかし何だか癢に触る。そんな従順なマネは、とてもできない。

「残念ながら、今あなたを死なせて差し上げる訳には行きません」
一度天井にやった眼を、椅子に納まる銀色の軍人に戻した。と、同時に、口から零れる様に出てしまった言葉がこれだ。

「アルセ、王族と言ったって、もうないに等しい身分なんだからね？ 首と胴体が離れる時は、離れるんだよ？」

口の利き方には気を付けなさい。と、兄が注意する。この人に言われてしまつては、終わりだと思ふのに。

そこへ、何かを思い出そうとするふうに自分のつま先辺りを見詰めたサディオが、追い討ちを掛ける。

「いや、妹君はずっとこうだ」

「それで下女と言うのは、無理のある設定だったねえ」
仲良しか。

無然とした表情を隠すつもりもなく、紅茶で満たしたカップをソーサーに載せて突き出す。乳母が見ていたら「もっと優雅に！」と悲鳴を上げて叱られる所だが、サディオは気にしたふうもなく受け取った。

そして口元に運び掛け、唇に触れる直前でカップがふと止まった。
「何故だ？」

銀髪に飾られた、深く青い眼が見上げてくる。

「何故、今は俺を死なせられない？」

今は、と言う部分が気になったらしい。

私は、呆れ半分に答える。

「当然でしょう？ あなたが今の状況で死ぬか、去れば、すぐにでも他国が攻め入ってきますから」

状況は、今よりずっと悪くなる。

今、我が国が無事でいられるのは、インヴィオの支配下にあるからだ。そしてその指揮を取っているのは、紺碧の盾。つまりサディオ

オと言う事になる。

そうでなければ、我が国と南の国境線を接するアルディデオホが黙ってはいないだろう。

あの国はこの十一年の間、何度も戦火を交えた国だ。兄の治世で拡大した領土は、全てこの隣国から奪った。

始まりは、兄が即位する事になった反乱で、我が国の守りが手薄になった頃だ。国力の低下を見越して、挑んできたのはあちらだった。こちらにもそれに応戦した結果、隣国の国土を奪ってしまったのだ。

以来、アルディデオホは我が国の隙を虎視眈々と伺っている。

今回の敗戦は、そんな隣国に取っては願ってもない朗報のはずだ。しかも、負けた相手はインヴィオなのだから。

インヴィオは、神に傳く国だ。

だから決して、他国の領土を侵しはしない。故郷だけを守り、愛する。そう言う人々なのだ。

亡国の民として、我が国の民が有り得ないほど楽観的な理由は、この辺りの事実にもある。

つまり、このトルトゥガリストが、インヴィオの一部になる事はない。属国の扱いにはなるだろうが、国としては残るだろう。

そして彼らは、いずれ去る。この国に敗戦の爪痕だけを残して。

アルディデオホは、それを待っているはずだった。

「その先は？ 俺は、いつまでもここにはいない」

「奪った領土は、返すつもりでいます」

サディオの問い掛けには、アサレアが答えた。

「元々、国土が欲しかった訳ではないのだし」

「それはおかしい。度重なる戦いで、トルトゥガリストは国土を拡大してきたはずだ」

「仕方がなかった」

兄は微笑む。

苦しさを誤魔化す様に。

「予が即位した訳を？」

「ああ、確か、先王の王弟が反乱を」

「そう。叔父が王族の血を尽く滅ぼし、予とアルセしか残らなかった」

私は、ベッドの兄から眼を逸らした。

あの時の粘つく様な血の匂いと、悲愴な気持ちは忘れられない。そして今も生々しく、事ある毎に胸を焼いた。

あの時、生き残った私達は、最後の王族になるだろうと覚悟したのだ。

「それほど、激しい混乱の後だ。アルディデオホから攻撃を受けた時、この国は極端に衰弱していた」

「しかし、勝った」

「余力がなかった。我々にできたのは早々に勝負を決めて、お客様に引き取って頂く事だけだった」

兄は薄く笑んだまま、首を横に振った。

国境を守るのは難しい。領土が広がれば、国境線も長くなる。だから国土の拡大は、不本意な結果だった。

しかし私達が国の中枢に携わった頃、もう既にこの国はボロボロだった。国境の守りを固め、他国の軍と睨み合うだけの力は残っていなかったのだ。だから却って、戦う他に生き残る道がなかった。

あの頃から考えれば、現在の兵力は何倍にも増えた。だが奪った国土が災いし、全ての国境を守備する事は今も難しい。

だから、考えた。

この国を、元の姿に戻せないかと。

半分の国土なら、充分に守って行けるのだ。

「今なら返せる。半分を与えれば全て寄越せと言い出し兼ねない国だが、インヴィオが背後に見えればあちらも無茶は言い出さないでしょうしね」

「我らを、利用すると？」

言いながら、皿に戻すカップが空だ。サディオからそれを受け取

り、熱い紅茶を注ぎながら兄を援護する。

「ご不満ですか？ この国が吸収されてしまったら、インヴィオは国境の約半分をアルディデオホと接する事になりますよ。これは中々、厳しい状況では」

「……なるほど」

口を挟んだ私を見上げ、サディオは唇を歪めた。皮肉げな笑みに、見えなくもない。

どこでそう思ったのか知らないが、紅茶を受け取りながらサディオが言う。

「似ていないと思ったが、やはり兄妹だな」

「冗談でも、やめて下さい」

不本意な事態に否定の意を表すと、ベッドの上からアサレアの忍び笑いが聞こえた。

(七)

(七)

まだ病み上がりの兄を休ませ、ガルバを残して寝所を出るといきなり問われた。

「黒い風はどこだ」

私は思わず足を止め、呆れ半分にサディオを見上げる。ここから見えるのは、横顔だ。

「まだ探してらっしゃるんですか」

「当たり前だ」

杖代わりに掴まった腕を引き、顔をこちらに向けさせる。

「何故？」

不思議でならない。

戦時下なら解る。敵方の人間を知る事は、勝つために有用だ。だからこそ、勝負が付いた今もまだ、固執する理由があるだろうか。

黒い風は、この国を捨てたのだ。もう二度と、私達に与する事などありはしないのに。

けれどもサディオは、私の疑問こそ理解できないと言う口振りだ。「あれほどの軍師だぞ。軍人なら誰でも、言葉を交わしてみたいと願うはずだ」

「はあ、そう言うものですか」

いかにも、買い被りとしか思えない。

「どこへ逃がした？」

「逃がしてなど、おりません」

これは本当。

だがサディオは信じるつもりがないらしく、歩く様に私を促しながら言葉を継ぐ。

「気付くべきだった。せめてあの時に」

「あの時？」

「今から戦が始まるという直前に、黒い風が姿を暗ませた」

インヴィオと接する、西の国境での事だ。敵の軍勢が目視できる、この期に及んで。

作戦の全てを取り仕切っていた軍師が、いなくなったのだ。

これは有り得ない。即座に、王への反逆と言っていい。だが事実、消えたのだ。

「手痛い裏切りでした」

「冗談なら、笑えないな。あれは最初から、そう計画していたのだろう」

「まさか」

空々しい否定が、大きな窓から陽の降り注ぐ廊下に響いた。それに重なる足音は、乱れる様子もなく規則正しい。

「いいや。俺も、軍も、いのように引つ張り出されたのだろう。お前達の思惑通り」

「思惑？ あれが逃亡したために、私達は国を失ったと言うのに」
我が軍は、黒い風を信頼し過ぎた。

あれの命がなければ、指一本すら動かせぬほどに。

それがいない。士気の問題だ。これでは勝てる相手にも、勝てなかっただろう。

増して、戦う相手はかの名高い紺碧の盾だ。

結果、国境でインヴィオと相対した部隊は、抵抗もせずに降伏した。

ただしこれは、王命でもあった。敗北を確信した時点での降伏決定を、王は指揮官に許していたのだ。

人は財産。

今回の戦いで、戦死者はない。

「先ほど、兄上も認めていたぞ。インヴィオが背後にいれば、アルディデオホに国土を返せる。リスクを犯さずにな」

「そのために、国を滅ぼしたと？ わざわざ、国を小さくするため

に？ まさか。兄がああ言ったのは、この状況になったからこそ」
「滅びはしない。インヴィオは、他国を侵略しないからな。それに、大きくなり過ぎれば歪むものだ。軍でさえそうだ。国なら、尚更。俺んだとしても、不思議はない」

「意外です。あの兄が、俺むほど真摯に国を治めていたと？ それに、国は残るとしても、国主はそのままとは参りません」

王座はインヴィオに手を出さない誰かに、新しく据え換えられるはずだ。

余程の酔狂でもない限り、自ら地位と権力を捨てたがる者はいない。そう考えるのが普通だと思っていたが、サディオは薄くにやりと笑う。

「王位に興味のない王族には、心当たりがある」

「そうですね。例えば、あなたとか」

銀色の髪が揺れる。堪え兼ねた様子で、隣で小さな笑い声が上がった。

「もう、乗ってしまったからな。途中で降りはしない。だから、白状してしまえ」

「告白しなくてはならない事など、何も」

「齟齬がある。最初からだ。隠し通せるとは、陛下も考えていないだろう。お前も、無理をする事はない」

そうなのだろうか。

黙ったままの私に、サディオは「では」と答えられない問いを投げける。

「では何故、お前達は我がインヴィオに戦を仕掛けた？」

「さあ。兄の考える事など、私には到底」

サディオは足を止め、片方の眉だけを持ち上げて私を見下ろす。

「口の減らない女だ」

そう言って、腕を解いた。見れば、私に与えられた部屋の前だ。扉の前に一人残されて、この場に二人だったのだと改めて気付く。ずっと頭の中にあった事が、瞬いた。

私は立ち去ろうとする男を、反射的に引き留める。

「何か、言う事がありでは？」

「……何だ」

本気で知らない顔なのが、余計に腹立たしい。

「私、怒っているんです」

「そうか」

「あなたにですよ」

あの日、いきなりキスをされてから。今日までその話題には触れずにきたが、それは機会がなかったからだ。

これは指先に刺さる、細かな棘。無視する事もできるけど、してはいけない。その内に膿んで、熱を持つに違いないから。

「それか」

「それです。あの事について、まだ謝罪を頂いておりません」

彼は少し考える仕草で、首を傾げる。

さらさらと音が聞こえそうに銀髪が流れ、目元で揺れた。

「嫌だったか？」

「……は？」

「不愉快だったのなら、望む通りに」

謝罪でも何でもしようと言う。

頭が、腐っているのかも知れない。

「そんな問題では」

「では、どんな問題だ」

問われて、ぐっと詰まる。

何が問題か？

そんなの解らない。ただ、胸にもやもやと何かがあって、息苦しくて堪らない。

どうすればこれが晴れるかと、そればかり考えているに過ぎないのだから。

「嫌悪は、激しい感情だ。愛と違って、見過ごしたりはしないはず。すぐに答えられないなら、心底嫌とも思えないが」

何を言っているのだろう、この人は。

からかっているつもりだろうか。挑戦なら受けて立とうと見上げると、届くかどうかの囁き声が鼓膜をくすぐる。

「迷うなら、もう一度試そうか？」

立ち去ろうとしていたから、私達の間には数歩の距離。そこから少しも近付いてはいないのに、私は圧された気がして後退った。

厚いドアの感触が、背中を支える。

そこから、今度は純粋な驚きに瞠った眼をサディオに向けた。

「そう言う、人だったんですか」

「いや」

自身、持て余すように。

「どうかしているんだ、今は」

本当に、驚かされる。

今、目の前にいるのは誰だろう。こんな人ではなかったはずだ。もっと冷たく、もっと孤独で、もっと私の苦手な……。

「サディオ師団長」

突然聞こえた第三者の声に、私は比喻ではなく飛び上がった。

一瞬、サディオもその表情にギクリとしたものを浮かべたが、さすがに要職の軍人だ。動揺は早々に覆い隠し、澄ました顔で近付いてくるコルロハを待った。

「どうした」

「セタが戻りました」

その名には、覚えがある。確か彼も、師団長付きの側近だ。私がまだ会っていない最後の一人だったが、留守にしていたのなら当然だろう。

敬礼しながらされた報告に、サディオは軽く頷く。それから私に向けた眼を伏せ、わずかばかりの礼を取ると踵を返した。

その背中、後に続くこうとするコルロハに命じる。

「残れ」

「姫君の護衛ですか？」

護衛と言えは聞こえがいいが、要するに監視役だ。命令ならば否応はないはずだったが、コルロハは不思議そうに首を傾げる。

「おかしいな。いませんか？　ギサンテが、姫の居室に控えているはずですけど」

「えっ」

私は慌てて身を反し、自室の扉を開け放った。

笑い死に、とても形容するのが相応しいだろうか。

床に額を擦り付けて突っ伏したギサンテが、ひーひーと苦しそうに肩を震わせていた。きつと眼には、涙すら浮んでいるに違いない。それで、全てを察した。聞かれていたのだ。私達の会話は、ギサンテに。

目眩を覚え、私は扉に頼ってずるずると崩れ落ちた。

縋るのに似た気持ちで視線を上げると、隠す様に片手を当てて、顔を伏せたサディオがいる。

最悪だ。

(八)

(八)

「機嫌直せて」

反省、もしくは謝罪の二文字とは全く縁のなさそうな、ギサンテの声だ。

同時にカチャカチャと茶器の立てる軽やかな音と、紅茶の香りが鼻先に届いた。

顔をそっと、枕から上げる。磨き込まれたサイドテーブルに、褐色の液体で満ちたカップが赤い本と隣り合って置かれていた。

何時間もベッドに潜り込んだままだったから、さすがに心配したらしい。眼が合うと、ギサンテはぽっと笑って私の頭を撫でた。

私の方が、逆に慌てる。相手が兄かうウレルでない限り、この行為は有り得ない。

「私、一応お姫様なんですけど」

「うん、知ってるぜ？」

ベッドの上に座り直し、じつくりと見詰めながら言う。だが当のギサンテは、何が言いたいか全くピンときてない様子だ。

今度は言葉を区切り、言い含める。

「頭を撫でたり、その言葉遣い、とんでもないと思いませんか？」

「あー……でも、今更なあ」

ガリガリと頭を掻いて、大体、身分を論じるならと私を指差す。

「そっちだって、オレには下女の時から偉そうだったぜ？」

「反省してます。もっと、狡猾にやればよかった」

噴き出して笑うのを耳で聞きながら、口に運んだ紅茶の味に顔をしかめた。濃過ぎて苦い。どんな淹れ方をしたのだろう。

「ああ、悪い悪い。やっぱ不味かったか」

「解ってて淹れたんですか」

「貴族の飲みもんには、慣れねえんだ。それでも、マシになった方なんだぜ」

「平民のご出身ですか」

「ん、ああ」

ふと、齒切れ悪くギサンテの顔が曇る。

それには気付かないと装って、言葉を継いだ。

「信じられませんが、じゃあ本当に優秀なんですね」

「まあな」

青い鎧の下で、ほっと体の力が抜けた。

貴族は一般的に、身内びいきが激しいのだ。確かに幼少の頃から厳しく躾けられた貴族達は、洗練されて如才ない。しかしだからと言って、優れた官吏とも限らない。

中でも武官は、生まれ持った資質が多く、命さえも左右する。だから平民が出世を重ね、官位を得る事も珍しくない。珍しくはないが、やはり貴族に比べれば少ないし、血統を重んじる者達からは疎まれる。

終始気楽そうなギサンテですら、その事に触れば痛む何かがあるのだろう。

だから側近五人の内、セタを除いた他の四人が平民だと聞いて驚いた。

「もちろん実力でしょうが、多いですね」

「どうだろうな。わざとそうしたって気がしなくもないけどな、オレは」

わざと？

首を傾げると、ギサンテは苦笑しながら立ち上がった。テラスに向かい、夜風の流れ込む掃き出し窓を閉じる。

「師団長殿は、血に選ばれた人だからな」

青い鎧は、こちらに背中を向けたまま。表情は見えない。

「本当は、誰も知らない所へ行きたいんじゃないかと思う。でもそれは許されない。だからせめて、身近にはオレ達の様な者を置くん

だ」

「――王が何故、貴族を重用するか解りますか？」

何の話をはじめたのかと、訝る様にギサンテが振り返った。

「いや」

「貴族に求められるのは、誇りと覚悟です。例え自らの命が尽きようと、王を背に庇い守る。それが貴族です」

「オレ達が、命を掛けてないって？」

「いいえ」

怒らせただろうか。

ギサンテを包む空気が尖った気がして、不安になる。だが部屋を飛び出すでもないから、先を続けた。

「貴族が王に全てを捧げるのは、栄達のためです。結局は、欲です。貴族には家があります。祖先から受け継ぎ、子に残すべきそれを守るのが、本当は彼らが一番に考えている使命でしょうね。そこにあるのは、利害でしかありません」

王に多くを差し出せば、多くを与えられる。ある種の取引なのだと、私は思う。

「ですが、あなたが身を尽くすのは、そんな事ではないでしょう？
「……つまり？」

本当に解っていないのだろうか。余計な事かも知れないと思いなから話始めたが、ここまで手応えがないと半ば呆れた。

「あの人は、利害関係が成立して余程でない限り裏切らないと解っている相手より、あなた方がいいと仰っているんです。これほど篤い信頼はありません。だから」

手を腰に当てこそしなかったが、殆ど子供を諭している気分だ。

「だから、あなたも自分を信じなくては駄目ですよ」

話し終えると、聞き役の男は私の頭をポンポンと撫でた。

「いっつもこんな難しい事考えてんのか？」

「考えてません。これは経験です」

頭に載った手が止まる。

「十一年前の反乱を？」

「話ではな」

父の逝去と同時に、王弟である叔父が即位を宣言した。だが王には兄と私を含めた九人の実子がいたために、叔父は王位からは最も遠い立場にいた。

「そのため叔父は、王位に近い兄達から殺し始めました。でもその内に姉達も殺し、最後に残ったのは兄と私だけでした」

正当性はこちらにあったが、大勢はあちらに付いた。多くの貴族が叔父を支援したのだ。

臣は正義ではなく、利を好む。身を以って知った事実だ。

「兄を支えたのはラウレル卿と、まだ二十だった子息のノーチェだけでした」

だから主従が信頼で結ばれるのを、不可能とは思わない。だが全てと言うのは、恐らく奇跡に近いだろう。

しかし、それでは国を守れない。だから貴族的な結び付きも、不可欠ではあるのだ。

「今はどうなんだ？」

「今？」

「今も、信頼できるのはラウレル卿だけかって訊いてんだ」

それは、難しい質問だ。

国が落ちても故郷に留まる臣下達は、きっと忠義に篤いのだろう。だが私は、それを信じない。

彼らに取って、王は誰でもいいのではないか？ かつて、叔父を担ぎ上げた様に。今は新しい誰かが王座に納まるのを、待っているだけではないのか。

思考の中に沈んでいると、ギサンテの手がグシャグシャと頭を掻き混ぜた。乱れた髪を押さえながら、慌てて離れる。

「何、もう！ 止めて下さいよ」

「あんたさ、ほんとに師団長殿と結婚しちまえよ」

「はい？」

「そしたらオレが、あんたを背中に庇ってやるぜ」

余りの飛躍ぶりに、きょとんと言葉を失った。どうして、話がそこへ行くのだろう。

「大変だよな、生まれがいいと。ガキが、あんな顔しなきゃなんねえんだからさ」

「……二十一です」

「あ？」

「ガキじゃありません」

「ガキだろ。色気がねえ」

「それは、ギサンテの主観でしょう？」

一般的に、十六、七になったら女は結婚していておかしくない。むしろ私など、ちょっと遅いくらいなのだ。

「確かに、年上が好みだけだな」

「どんな？」

「未亡人とか」

「……それ、覚えて置いた方がいいですか？」

どうでもいい話を聞いてしまったと後悔していると、表情から笑みを消したギサンテが押し留める様に手の平を出した。

はっとして口を噤む。兵士がこの仕草をしたら、大人しく従うべきだと教えられていたからだ。

ギサンテは手振りで私をベッドの陰に屈ませると、腰に吊るした剣に手を掛けた。

すぐに抜き払えるよう、鞘を握りながら親指で鐔を押す。鐔と鞘のわずかな隙間に刀身を覗かせ、そっと扉に忍び寄った。

「誰だ」

返事はない。

緊張が、こちらまで伝わってくる様だ。

ベッドの陰から少しだけ覗くと、ギサンテの半身が眼に入る。こちらが屈んでいるために、彼の足元はベッドに隠される格好だ。

青い鎧の下で深い呼吸を一つして、扉に手を掛け剣を抜く。ドア

を開いた。素早く。鋭い切っ先が油断なく空を裂き、止まった。

「……はいはい」

聞こえてきたのは意外な事に、ため息混じりのそんな声だった。ギサンテは剣を収めると、そのまま部屋を出て行ってしまう。けれども扉を閉める直前に、こちらに向けた顔が薄く笑んでいたかも知れない。

私は頭だけをベッドの陰から覗かせて、困り果てた。

結局、どうしたのだろう。あの様子では危険があるとも思えないが、何も言わずに出て行くのは礼儀としてどうかと思う。じゃあ何か、急ぐ理由でもあるのだろうか。

堂々巡りに悩む私に、カシヤリと乾いた音が届く。まるで床を引っ掻く様な。

はっとして、急いで立ち上がる。

ちょうど、跳ねる様にベッドに上がった白金の狼が視界一杯に飛び込んだ。

（九）

（九）

翌日になると、私とサディオに既成事実ができていた。

「そんなもの、ありません！」

もちろん、噂の上で。

私はこの新しい噂を、どこか寂しげな空気を醸し出す兄の祝福で初めて知った。

「まあまあ、祝ってくれてるんですから」

「だからいいって事にはなりません！」

本心はともかく、表面的にはなだめようとするコルロハに噛み付く。

「余計に悪いです。全然こっちの話聞こうとしなくて、まだ兄の誤解は訂正し切れてないんですからね」

「いいじゃねえか。どうせあっただろ、何か」

「何かって、何？」

新しく口を挟んだ標的に、ゆっくりと視線を向けながら問う。

「お願い。教えてギサンテ。解らないんです、私。どうして殆ど二人つきりになった事もない人と、そんな噂が流れるのか！」

「え」

「え？」

「ええと」

私の剣幕にすっかり心に距離のできていたセタが、おずおずと口を開く。

「でも昨夜は、姫の寝所にお泊りになったはずでは」

「誰がですか？」

「師団長殿しかいねえだろ、そりゃ」

「そんな訳、ないでしょう」

余りの濡れ衣に、却って力が抜けてしまった。

「昨夜は、顔も見えていません」

「ああ？　嘘だぜ、そりゃあ。だってオレが昨日……」

言い掛けて、言葉が途切れる。何か思い当たった様子で、ギサンテが私の両肩を掴んだ。

「じゃあ昨日の夜、何なら部屋にきた？」

「それなら、ギサンテも見てるでしょう？　入れ代わりに出て行っ
たんですから」

「白い狼か」

「ええ」

その瞬間、三人の男が同時に「ああー」と無念そうな声を上げ、
天を仰いだ。

「すいません。今回は、僕達の早とちりです」

「解りました。今度のは、あなたが主犯なんですね」

いち早く自分を取り戻し、向き直ったコルロハに私は確信を持っ
て頷いた。

「……嫌だな、誤解ですよ」

誤魔化す気があるのかと疑いたくなる薄っぺらな言い訳を遮って、
ギサンテが問う。

「で？」

「で？」

「何してたんだ？　狼と」

「聞きたいんですか？」

「心底」

他の二人も同意を示す。

変な人達だと思いつながら、私は昨夜の記憶を探り始めた。

本当はぎゅっと抱き付いて、柔らかな毛皮をずっと撫でていたか
った。

しかし前回の様に逃げられたら、悲しい所の話ではない。だから
そこはぐつと堪え、狼の隣で静かに座るに留まった。

どれほどの間、その姿を見詰めていたか解らない。

それはベッドの上に手足を伸ばし、首だけを持ち上げてまるでこちらを窺う様だ。深海の瞳が、灯火の影を映して揺れる。

手を伸ばして触れたい衝動と戦っていると、狼はやがてゆっくり立ち上がった。ベッドの上をふわふわと歩き、枕元に寄るとサイドテーブルへと首を伸ばす。

その上にあるのは殆ど中身の残ったティーカップと、赤い表紙の童話集だ。

鼻先で赤い本に触れ、それから私に眼を向ける。何度も繰り返すその仕草は、何かを促している様に見えた。

試しに赤い本を手にとると、獣はテーブルを離れた。その足で隣に戻ると、体を横たえその顎を私の膝に載せる。まるで、本を読んどせがむ子供だ。

驚きはしたが、それ以上に暖かな何かが胸に溢れる。

そっと白金の毛並みに手を沿えながら、本を開く。声に出して文字を追い始めると、狼は心地よさそうに眼を細めた。

「でもその内に、私も眠ってしまったみたいで。朝になったらいなくなっていて、とても残念でした」

話し終え、今朝の落胆を思い出して足元へ落した眼を上げる。

と、ギサンテとコルロハは両手の中に顔を伏せ、声を殺して肩を震わせていた。こちらは、笑っているのに違いない。

だがセタに至っては口に手を当て嗚咽を抑え、頬に一筋の涙を流していた。

「え……ええっ？ 私、泣かせる様なお話、しましたか？」

「いいえ。ただ、感激してしまって」

一体、どこに。

問い詰めたと思ったが、それどころではなくなってしまった。

パパを伴い、サディオが現れたからだ。

「何をしている」

銀色の男は、側近三人の背後から姿を見せた。だから長身の彼ら

に殆ど埋もれ、隠されていたのだろう。

私の存在に気付いたのは、本当に間近まで迫ってからだ。改めて驚きの声上がる。

「この国の王族は、大人しくしてられないのか？」

いや、違った。これは皮肉だ。

しかし私は落ち着いて、用意していた言い訳をスラスラと口にした。

「ネウト先生に、診察して頂こうと思ひまして。もう随分よいのですけど、念のため、もう少し診ましようと思つて下さったので」

今いるのは汗臭い鍛錬場だが、これには矛盾しない。ネウト医師の診察室は、ここからすぐだ。実は、ご機嫌伺いに訪ねた兄の所であの質の悪い噂を耳にし、犯人を探すべく足を運んだのだ。

今日に限って、兄と私の護衛はガルバとセタだった。この二人と、パパが不用意な噂を流すとは思え難い。残るは二人。実際、犯人はコルロハで間違いないと確信している。

「診察なら、ネウトを部屋に」

「まあ。お忙しいネウト先生に、そんなわがまま。私には、とてもさすがにとぼけていると察したらしく、サディオはずっと眼を細めた。しかしそれ以上は何も言わず、ため息めいたものを零しながら顔を背ける。

「セタ、姫にお戻り願え。それから、もう決して部屋から出さな。何を言われてもだ」

「……はい。申し訳ありません」

何かを感じ取る。セタは神妙な面持ちで、礼を示して頭を垂れた。さあ、と背中を押されたが、私の足は動かない。このまま去れと言う方が、無茶だ。

「何があつたのですか」

「説明する謂われが？」

質問に質問で返すのは、余り巧いやり方ではない。その時点で、やましい何かを告白している。

だが問い詰めた所で、サディオが相手では口を滑らせる事すら期待できないだろう。

唇を噛んでいると、ギサンテが笑う。

「このお姫様は、頭がいい。そんなんじや納得しないぜ、師団長殿」
「納得する必要はない。頭がいいならば尚更、蚊帳の外にいて頂く」
背を向けてから、一度もこちらを見ようとしなない。

昨日までとは、まるで違う。これは拒絶だ。サディオの背中とは、私を拒む。私だけを。

「参りましょう」

今度は、セタの声に従った。

何故だろう。

最初からなら、まだ解る。けれども今頃、私を避ける理由は何？
まるで苛む咎の様に、その疑問が胸の中から消えなかった。

(十)

(十)

腰掛けた椅子から自室の出窓に頬杖を突き、格好だけは景色を眺める。

この二階の窓からでは、庭や城壁が見えるだけだ。変化に乏しく、飽きるほど見慣れたそれを、しかし私はいつまでも眺めた。

実際は、何も見てなどいなかったからだ。ただぼうつと、サディオについて考えている。いや。本当は、考えてもいない。答えなど、出るはずがない。

恐らく、あちらも理解されたいとは思っていないだろう。拒んだのは、サディオだ。

なのに、頭の中にあるのはただそれだけ。

「姫、昼食の準備が」

ノックに応じ、ドアを開いたセタが呼ぶ。

眼をやれば、剣も鎧も身に着けない非武装兵がテーブルに食器を並べている。一応の捕虜となつてから、給仕を担当するのはインヴィオの兵士だ。

今朝の事があつたからか、そんな些細な部分にさえ何か事情が見える気がする。

よく考えれば、そうなのだ。監視もただの兵士で充分なのに、サディオはわざわざ側近を手放し、私や兄に付けている。

何かあると感じるのは、穿ち過ぎだろうか。

ふっと、息を零す。

だから、どうだと言うのだ。私にできる事など、もうありはしないのに。

セタの呼び声に応えるため、自分のドレスに視線を落とし、手の平で皺を直して立ち上がる。それから、テーブルの方向へ眼を戻す。

咄嗟には、驚く事さえできなかった。

トレイに載った食器を、テーブルに移す兵士。その斜め前にセタ。彼らから、すぐ傍だ。

私が着くべき椅子の背に手を掛けて、黒い外套の男が立つ。深く被ったフードのせいで、顔は深い影の中だ。

いつ、どこから。この男はどうやって、ここに入り込めたのだろう。目の前なのだ。セタが、気付かぬはずがない。

そこまで思い到り、はっと息を呑んだ。何故、セタは何も言わないのか。そして二人の兵士を注意深く窺えば、彼らは呼吸の有無すら疑うほどに身じろぎ一つしていない。

息を詰める私の様子に、男は口元だけで薄く笑む。足の先をこちらに向けると踝までの外套を揺らし、あっと言う間に距離を詰めた。「控えなさい！」

大きな声で撥ね付けると、男はその場でピタリと止まって膝を折る。外套が、黒い裾を床に広げた。

「……お初に」

左手を胸に当て、頭を下げる。その腕に、細く編んだ革紐が巻き付くのに気付いた。

頭がめまぐるしく回転を始めたが、それを気取られぬ様に注意して、口を開く。

「何者ですか」

「姫様の身をお案じ申し上げる主より、遣わされた者にございます」

「主とは？」

「今は、何卒ご容赦を」

「心配せず、明かしなさい。真に私の味方ならば、こちらにも真心を込めて褒美を与えねば」

「そのお言葉だけで、身に余る誉れかと」

「慎み深い事です」

私は身を屈め、男の肩に軽く触れると頭を上げさせた。眼の中にお気に入りの臣に向ける色を浮かべ、にっこりと笑う。

「それで、どうやって私を助けて下さるの」

我が意を得たと言わんばかりに、それから男は饒舌に語った。

曰く、「インヴィオは、姫様を謀っているのです。信用はなりません。様子がおかしと、感じにはありませんでしたか？

それもそのはず。この混乱に乗じ、隣国が兄上様の王位を奪おうと画策しております。しかしあれらは関わりなき事と決め付けて、国に戻ろうとしているのです。全てを承知した上で、見捨てようと。

……姫様、兄上様とこの国をお守りになれるのは、あなた様しかおられません。どうぞ、覚悟をお決め下さい」

妙に冷えた心持ちで、私はこれを聞いた。

再び深く頭を下げた黒衣の男に、戸惑いを滲ませた声で疑問を投げける。

「けれど、何ができるでしょう。私の様な、無力な者に」

「篡奪者は、兄上様を亡き者にせんと兵を集めております。数はおよそ二千」

顔を上げ、こちらを見上げる。影に隠れたその中に、不気味に光る瞳を見た。

「どうか姫様の知略を尽くし、兄上様の窮地をお救い下さいませ」
思わず、ぎゅっと固く瞼を閉じた。

知っているのだ、この男は。

次に、込み上げたのは嘲笑だ。火が付いた様に奇矯な声で、私は笑った。よろめきながら窓を離れ、テーブルに近付く。

強張って動かない兵士の手からグラスを取り上げ、デキャンタのワインを乱暴に注ぐ。一気に飲み干し、その場で床にへたりこんだ。兵士の編み上げ靴を目の前に見ながら、装飾が施されたテーブルの脚に縋り付く。乱れた息を何度も呑んで、震え出しそうな動揺を抑えた。

「姫様、お気を確かに」

間近に片膝を突き、男が声を掛ける。そちらへ手を伸ばすと、黒い外套の中から手が現れてそれを握った。

右手だった。私はわざと、左手を出した。

撫でる様に手を滑らせ、その手首を握る。そうして男を掴まえると、素早く伸ばした逆の手で兵士の編み上げ靴を探った。賭けに出たのだ。

指先に、柄が触れる。勘が当たった。腰に剣を帯びない兵士は、こうして膝まで隠す靴の中に短剣を隠す事がある。私はそれを抜き払い、男に向けた。

無防備そうな、首筋を狙って。

男は咄嗟に、掴まれたのと逆の腕で身を守った。私の走らせた切っ先は、その左腕を引っ搔いたに過ぎない。

だが足元には、革を編んだ腕輪が落ちる。石が三つ、編み込まれていた。

腕輪をさっと拾い上げると、窓に駆け寄る。勢いのまま椅子を振り上げ、窓に叩き付けた。大きな音と共に碎け散るガラスの隙間から、腕輪を外へ放り出す。

それが指先を離れたか、どうか。

背後から肩を捕らわれ、壁に叩き付けられる。逃れる間もなく男は片腕で頸を掴み、私を壁に押し付けた。

「話の通り、小賢しい女だ」

ぼそりと呟く。そこには最早、先ほどの味方を気取る色はない。

ぞつとする声。足の下でボロボロと崩れる崖の下を、覗き込んでしまった様な気分だ。

何とか絞り出した自分の声は、どうしようもなく震えていた。

「誰が、話を？」

「明かすとも？」

「いいえ。でも、構わない。誰が私を売ったかは、もう解ってる。解らないのは、お前だけ」

何を思ったか、男は喉の奥をクックツと鳴らす。もしかすると、笑ったのだろうか。

「ただの使いさ」

「暗殺者を伝令に？ 豪気な話です」

「殺さないと、誰が言った」

「そのつもりがあるのなら、とくに私は死んでいるでしょう」

私の考えが合っていれば、この男はプロの暗殺者だ。ならば、無駄な遊びはしない。姿すら見せず、命を奪って去る事もできるのだ。奇妙に思うのは、それだけではない。

さっき、窓を割った。この騒ぎは、下にも伝わっているだろう。

いつ、兵が駆け付けるか解らないと言う事だ。

なのにどうして、落ち着いていられる。

「代われ」

唐突な言葉は、私に向けられたものではなかった。

私達しかいないのに？ だがそれは、間違いだった。男の言葉に従って、どこからともなく人影が現れたのだ。男と同じ黒い外套を纏っていたが、背丈は私ほどしかない。男の手が私の頸から離れると、もう一人は素早い動作で同じ部分に刃物で触れた。

冷たい感触は恐ろしさと呼び起こし、体の動きを制限する。首を回す事さえできず、私は男の姿を眼で追った。

テラスの傍で、男はさっと黒衣の中に身を埋める。次の瞬間、その上に碎けたガラスが飛び散った。誰かが、外からガラス戸を蹴り開けたのだ。

誰が？

「……どうして」

その声がどんな色を含んでいたか、自分でも解らない。

剣を手に飛び込んできたのは、サディオだった。その顔を、私は今まで見た事がない。燃え立つ様な激しい何かを眼の中に宿らせて、見る者の肌をビリビリと刺す。これは誰？

「師団長！」

わずかに遅れ、テラスをよじ登ったパパが叫ぶ。だが、止まらない。

サディオは剣を力任せに横に払い、黒衣の男はそれを避けて飛びずさる。しかしそれには眼もくれず、空いた隙間を擦り抜けてあつと言う間にこちらに迫った。

けれども、私の頸には刃物が突き付けられている。パパが、息を呑むのがはつきりと聞こえた。

喉を裂かれる。他人事の様にそう思ったが、床に滴る温い血は、私の物ではなかった。

判断させる暇を与えず、サディオは素早く短剣とそれを握る手を諸共に捉えた。私の喉元から強引に刃物を引き剥がし、黒衣に包まれた腹を蹴って退けたのだ。

小さな悲鳴を上げ、小柄な人影は壁際まで蹴り飛ばされた。その悲鳴の声の幼さに、ぞつとする。これではまるで、少女ではないか。だが小柄なそれは即座に跳ね起き、離れる瞬間にサディオの手の平を裂いた短剣を拾い上げる。雛が親の羽に隠れるのに似て、大きな男の背後にさっと隠れた。

今は私も、同じ様にサディオの背に庇われている。その位置から、血を滴らせる左手にハンカチを握らせた。

ぴったりと張り付く背中が、振り返らず問う。

「怪我は」

「ありません」

駆け付けたパパと肩を並べ、黒衣の二人に剣先を向けて警戒する。あの恐ろしい様な表情を、まだ浮かべているのだろうか。

「面妖な話だ」

クックツと、影に沈んだ内から笑う。

「神の落とし子が、血塗れの姫を守るとは！」

「何……」

目の前にある銀髪が、声に合わせてわずかに揺れた。

血の気が引く。

「紺碧の盾が、黒い風を！」

男の声が、止めを刺した。

サディオが今、守っているのは？

——私。

なら、黒い風は。

青い瞳が、私を捉える。振り返ったその顔は、まるで絶望の様だ
と思った。

(十二)

(十一)

「サディオ……！」

血の匂い。

敵に背を向けた一瞬を逃さず、黒衣の少女が短剣を放つ。それは吸い込まれる様に、鎧の途切れた肩口を裂いた。

傷を受けながら咄嗟にサディオは私を抱き締め、倒れる様に床に伏せた。一呼吸前まで自分の体があった壁に、次々と短剣が刺さるのを見た。その視界が、銀色と深海に似た青い瞳に塞がれる。

手が、確かめる様に私の頬に触れた。そして、刹那。見詰め、離れた。

「パパ、頼む」

飛んでくる短剣を叩き落しながら、パパは自分の陰に私を入れる。その横を擦り抜け、サディオは身を低く駆け出した。傷を負ったのは、利き手の肩だ。あれでは剣を振るえはしない。武器もなく敵に向って行く姿は、私を酷く混乱させた。

何が起こったか、理解できなかった。

彼は肩の青い衣を解き、鎧を固定するベルトを外す。次の瞬間、床に崩れた。消えたと言ってもいい。サディオの身を包む一切の物が床に落ち、その中からまるで水銀の様に輝く何かがグニヤリと現れ、形を成した。

美しい、狼の。

それは何よりも速く駆け、眼は途中から血の足跡を追うほどだった。寄り添う二つの人影に難なく迫り、踊り懸かる。白い牙が男の喉笛を捉え、――しかし、引き裂く事はできなかった。

狼の体は男の目前で雷に撃たれた様に痙攣し、手も触れず床に叩き付けられた。

その不可解さに、私は怯む。だが狼は諦めず、すぐさま立ち上って再び黒衣の男目掛けて跳躍した。

今度は、刃物が獣の腹を裂いた。男の背後から、少女が短剣を突き出したのだ。血に染まる白金の体が、彼らの外套を揺らして足元に落ちる。力なく。けれど前脚は、なおも立ち上がろうと床を掻いた。

どうして。

強く思う。

夢を見ているのだろうか。だとしたら悪夢だ。目の前の光景を、頭が信じる事を拒んでいる。鉄が溶け、別の形に変わる様に。

その様に、サディオが狼に姿を変えたと言うのか。

そうして、死に掛けているのか。

命を賭けるべきものは、ここには何一つだってない。どうして、こんな。

自らの身と引き換えに、まるで私を守る様な。

唇を噛んで駆け出す私を、パパが止めた。

「離して！」

「行っては駄目だ！」

「このまま、死なせるつもりなの？ 許さない。そんなの、絶対に許さない！」

涙が、私を掴んだ腕に落ちた。そうして初めて、自分が泣いているのだと知った。

ふと、黒衣の少女が男の黒い袖を引く。

眼の端にそれを捉え、パパはわずかに眉をひそめた。手が緩む。

私は半ば突き飛ばす様にして、捕らわれた腕から飛び出した。

パパははっと息を呑んだが、私がサディオへと辿り着くまでに黒衣の二人は後ろに数歩身を退いた。それを追おうと身を振る狼を、体全部で抱き止める。

青い鎧が間に割って入るまでのわずかな間に、黒い男は私を見下ろして言った。

「自らの役割を、思い出すがいい」

その意味を質す前に、激しい勢いで扉が開かれる。

何人もの兵士が部屋の中になだれ込み、先頭のギサンテは状況を見るや舌打ちした。あつと言う間に私とサディオは背を向けた兵士達に守られたが、その時にはもう黒い外套の男達は影も残さず消え去っていた。

血に汚れた白金の狼を、急いで軍医であるネウト医師の元へと運ぶ。

私も促され、その後続いた。その時初めて自分の体に眼を落とし、思わず小さな悲鳴を上げた。ドレスの胸や膝が、べつとりと血に染まっていたのだ。

余りに、流した血が多い。サディオの血だ。これでは本当に、死んでしまう。ガタガタと震え出す手足を、止められなかった。

見兼ねての事だろうか。暖かな手が背を支え、頭を撫でる。

左右から青い鎧が私を挟み、手を伸ばしていた。

耳打ちと目配せで、側近達は情報を共有する。これまでの様には、行かない。

「聞いたのでしょうか。私が、黒い風だと」

「ああ。道理で、賢い訳だ」

ギサンテは苦く笑って、もう一度私の頭を乱暴に撫でた。

泣きたい様な、恐い様な。悲しい様な、怒りの様な。あらゆるものが、私の中で渦巻いていた。

世界の果てに倒れ伏して、声が出なくなるまで叫びたい。

何よりも、サディオが死に掛けている。私のために。私のせいで。もう、滅茶苦茶だ。

「お会いになりますか？」

どのくらいそうしていたか、解らない。処置室のドアの前で、ベンチに座って組んだ指を唇に押し当てて。

祈る様な格好で待つ私に、声を掛けたのはネウト医師だ。いつ、陽が暮れたのだろう。診察室のあちこちに灯された灯火が、チロチ

口と揺れてその姿を照らしていた。

白い上着と、手を拭う布が真っ赤な血を吸っていた。ずっとサディオに付いて処置室に籠もっていたその人を、縋る様な眼で見上げる。ネウトは戸惑う様な、困った様な微笑みを浮かべて言った。

「サディオは重症ですが、落ち着いて眠っています。大丈夫だから、会う前に着替えていらっしやい」

「構いません、そんな事」

赤黒く血の乾いたドレスを、私はまだ改めていない。この際、そんな事が大した問題とは思えなかったのだ。

優しいその人は、ふと顔から笑みを消す。そして何かを見極める様に、しばらくじっと私を見詰めてからこう言った。

「有難う。サディオのために」

ネウトの胸にあったものを、まだ知らない。

医師は処置室に私を招き入れると、サディオの眠るベッドの傍に座れと勧める。

「構いませんよ。手を握っても」

ベッドの上に向けた眼を驚いて移すと、脇に立ってネウト医師はからかうでもなく微笑んでいた。

「彼はもっと、誰かに触れた方がいい」

「誰か？」

「大切な人なら、一番いい。あなたがそうなって下さったら……」

「でも、私は」

大切にされるべき人間ではない。

私の周りを取り巻くのは、死体だけだ。

「関係ない」

何も聞かずにピシヤリと決め付け、すぐに温和な口調に戻って問う。

「重要なのは、どう思いかです。サディオはとっくに、あなたを望んでいます。アルセ姫、あなたは？」

「でも、そんな事は一言だって」

ベッドの上で、枕に載った銀髪に眼を向ける。そうだ、それに思いつく。

「今朝だって、私は見ても貰えませんでした。これは、拒絶でしょう？　なのに何故、私を望んでいると？」

「彼は、大切な事を隠し過ぎる。……そうですね。あなたには全て、知って頂かなくては」

すると心を決める様に何度か小さく頷いて、医師は手近の椅子を引き寄せて腰を下ろした。そして真剣な顔で、私と向き合う。

「神の落とし子と言う言葉を、知っていますか？」

どうしてだか、ギクリとした。

それはさっき、黒衣の暗殺者から聞かされたためか。

「いいえ、意味までは」

「インヴィオ王家の血筋の中に、稀に生まれる者を指します」
稀に生まれる者。

ネウトはゆるやかに、サディオに向けた眼を戻す。

「インヴィオに伝わる神話を、ご存知でしょうか。取り分け、王家の起こりに纏わるものを」

「少しだけ。確か、インヴィオの緑豊かな土地を愛された神が、領土を清く守るために神獣を下されたのが王家の始まりだと」

「その通りです。故に、王家には神獣の血が流れ、稀に神の祝福を色濃く受けた御子が生まれると伝えられています」

「……サディオの様に？」

話の行く先を読んで、私が言葉を継いだ。ネウトはただ、静かに頷く。

「彼は、獣の姿で生まれたそうです」

だが私の胸には、釈然としないものが残る。

「王家が、始祖を神話で飾るのは……」

「よくある話です。本当かどうかは、解りません」

そうなのだ。いかにも王家に都合のいい、怪しげな神話をでっちあげる事はよくある。

だが、王家に近しい者が、こうもはっきり自国の成り立ちを否定するのには驚かされた。

こちらの内心を知っての上か、ネウトは淡々と語るのを止めない。「ですがともかく、人と獣の姿を行き来する者を神話と重ね合わせ、インヴィオでは神の落とし子と呼ぶのです」

「インヴィオには、多いのですか？」

「神の落とし子が？ いいえ。サディオの前は、二百年近く前の文献に記述が残っているだけです。ですから、大切にされるのです。神の祝福を、……常ならば」

ネウトの言い方は、そうではなかったと言っている。

「サディオの母君は、インヴィオの民ではありませんでした。王がご寵愛の余り、特に後宮へお召し上げになった旅の踊り子で」

その先が見える様で、私は手の平を自分の口元に押し付けた。

「生まれたばかりの我が子を一目見るなり母君は卒倒され、以来一度も胸に抱こうとなさらなかった。それどころか、目の届く場所にさえお近付けにならなかったそうです」

「王家の神話に馴染みの薄い他国の民なら、尚の事……ですね」

「侍従や臣下はサディオを大切に育てたが、恐れもしました。天からの預りものである神の落とし子は、父君である王ですら親子である前に畏怖すべき存在だったのです」

泣いては、いけないと思った。これはサディオのものだから。何も解りやしないくせに、見せ掛けの同情なんて意味がない。

けれども、ではどうすればいいのだろう。

息もできないほど一杯に、この胸を苦しめる気持ち。

「では誰が、愛したのですか」

だから、問わずにはいられなかった。

誰が抱き締め、誰が愛しさを宿した瞳で見詰めたの。誰が、恐いほど静かな夜、眠る前の心細さを暖かに包んだの。

誰が。

「誰も」

「大人になってからは？」

「余り、変わらなかったかなあ。軍に飛び込んだのは、そのせいもあったかも知れません。王宮には事情を知り過ぎた貴族だけですが、兵士はそうではありませんから」

「ギサンテも、その様な事を。ですが、気詰まりでないと言うだけで、彼らを側近に選んだとは私には思えません」

「もちろん、そうです。しかし彼らもまた、サディオを敬い命を預けるが、受け止められはしないでしょう」

「女性は？ 恋人はいなかったのですか？」

答える前に、ネウトは少し意味ありげに笑った。

「わたしの知る限り、自分からアプローチした相手はいませんね。」

——今までは」

「余計な……、話をするな」

私とネウトは一瞬顔を見合わせ、それから跳ねる様にベッドを振り向いた。

億劫そうに深くゆっくりと息を吐いて、サディオの青い眼が私達を見る。ネウトが枕元に寄り、脈や眼の中を確かめて問う。

「具合は？」

「痛い」

「薬を用意するよ」

笑って、私に小さく頷くとネウトは隣の部屋へ足を向ける。ドアは閉じられなかった。そのため私はベッドの枕元に口を近付け、小さな声で囁いた。

「ごめんなさい」

「何が」

秘密と、嘘と。

血に塗れた私の罪と。

「構わない。変わった女なのは、知っていた」
「どうしてだろう。」

自分の中に広がる感覚に戸惑って、唇を噛みながら俯いた。誰か

が見れば、困った顔だとも知らない。

ただ私を、知っていると云っただけだ。

なのにどうして、許された思いがするのだろう。胸の中をくすぐられた様に、甘く、柔らかなものが込み上げてくるのか。

解らなかった。

(十二)

(十二)

「気に掛かるのは、ハルディンマゴが介入している事です」

夜半を過ぎた病室。サディオのベッドを囲む形で、私達は議論を重ねていた。

皆が少し眠れと勧めたが、時間を惜しんでサディオが聞く耳を持たなかったのだ。白く清潔なシーツの上には、黒い外套の男が残して行った腕輪が載せられている。

これは死の商人の印だった。

許された石の数は、役割を示してもいる。腕輪の石が一つなら運び屋。二つは密偵。三つは最高料金の暗殺者だ。

ハルディンマゴはこれら三種の人材を使い、任務をこなす事で国を潤す。魔術師の国と呼ばれる中で、特にこの任に就く者を死の商人と呼ぶのだ。

この場に残された腕輪には、石が三つ。私達が相對したのは、暗殺者だと言う事を示していた。

「どこが気に掛かる。戦に際し、死の商人を雇う国は多いぜ？」

「国ならね」

疑問を呈したギサンテと、病室の入り口を警戒するパパ。そしてベッドの上で緩く起した半身を、枕で支えるサディオを見回す。ゆっくりと纏めた考えを、彼らに語った。

一石や二石と違って、国でさえ三石はそう簡単には雇わない。実は要人を一人や二人消しただけで、滅んでくれる国はそう多くないからだ。

しかも桁違いに高額な料金は、小さな国なら財政を傾け兼ねないほどになる。

そのために国家でさえ、三石を使うには慎重にならざるを得ない。

それほどの存在なのだ。どんな富豪であろうと、とても個人では雇えないだろう。

「だから、どこかの国が背後にいるのは間違いないと思うのです。ですがあの男の言っていた通りなら、その計画は内通者なしには有り得ません」

「何故？」

息をするのも苦痛なのか、サディオが短く説明を求めた。

「一つは、私が黒い風だと知られていた事。もう一つは、あの男は私にこれから起こるのは篡奪だと明言した事」

篡奪とは、臣下が王位を奪う事。他国の侵略は、これに当たらない。故意が過誤か、暗殺者はこの言葉を用いた。これに、意味がないとは思わない。

パパが促す。

「内通者に、心当たりは」

「あります。ですが、それが一番解らない」

「そりゃ、裏切り者の気持ちなんか解らんだろう」

ギサンテのもっともな言い分に、苦笑した。

その私の頬に、包帯の巻かれた手が触れる。自分のために、傷付いた手だ。そんなものに柔らかく包まれて、嘘なんか吐けない。

そのままサディオの胸に引き寄せられて、顔を伏せた。

理解できなかった。

あの人が、裏切った事実ではなく。裏切る理由が、どうしても。

翌日。

再び、セタが私の護衛に付いた。今度こそ必ず守ると堅く誓い、ドレスの裾に触れんばかりに膝を突く。これではまるで、我が国の臣の様だと呆れてしまった。

「昨日の事は、仕方ありません。まさか本当に、あんな不思議な力を使うとは」

知らなかった。

死の商人はミスをしない。その魔法の様な手腕を例えて、魔術師

の国と呼ばれるのだと思っていたのだ。

正直に言うと、魔法や奇跡の類を私は信じない。けれども昨日の様に目の当たりにすれば、自分には理解できない何かがあるのだと認めざるを得なかった。

セタは、自分が動かぬ人形の様にされた事も、その間の記憶もないのだと言う。その責を問うのは、酷だろう。

だが、彼は苦い顔で首を振る。

「師団長閣下からも留意する様にと、特にお言葉を頂いていたのです。近隣国が騒がしいなら、姫や兄上様にも何か仕掛けてくるやも知れぬと」

思わぬ言葉に驚き、息を詰めた。

では、私がああ暗殺者から聞かされる前に、サディオ達は誰かがこの国を狙っていると知っていた事になる。

その辺りを聞くと、セタが皆から遅れてこの城に入ったのはそれが理由だった。どんな形であれ、敗戦に浮き足立つ時機を狙う国がないとは言い切れない。念のため、近隣国の動向を探っていたのだそう。

「調べる内に、本当に不穏な噂を耳にしました」

とにかくその時点で手ずから情報を持ち帰り、残してきた内偵から事が起こるなら近いと知らされたのが昨日だそう。

ただそれも剣呑な動きが見られると言うだけで、首謀者や詳細については全くと言うほど掴めていない。

「兄には？」

「お伝えしました」

「では、知らなかったのは私だけ？」

「師団長閣下が……」

話してしまつてよいものかと、迷う様子で言葉を濁す。だがどこから聞いていたのか、セタの背後からヒョイと姿を現してギサンテがばらした。

「黙っとけつったんだよ。心配掛けなくなつたんじゃないの？」

「……解り難い人……」

指先の下に隠して、ため息を吐く。

しかしそれなら、あの朝急によそよしくなった態度も腑に落ちた。

「いいか？」

悪戯っぽい笑みを引っ込め、神妙な顔を作ってギサンテが問う。

青い鎧の二人に挟まれ、私は長い息を吐き出してから頷いた。

「始めましょう」

高い天井から垂れた布を左右に開き、足を踏み入れた先を王の間と呼ぶ。

これは隙間なく石を組み合わせた、堅牢な造りをしている。壁の高い位置には幾つもの小窓が切られ、床は美しく掘り込まれた溝が飾る。

だが背丈の数倍もある高い天井に比べ、意外に思うほど奥行きは狭い。それは普段、王が謁見を許した者に会うための部屋だからだ。一部の選ばれた者しか足を踏み入れる事ができず、そのために五十人も入れば一杯になってしまう。

入り口から一番遠く、細長い部屋の奥に王座がある。だが今、一段高いそこは空だ。代わりに、椅子が三つ手前に並び、中央にアサレアが腰を下ろしていた。

その隣、まだ誰も座っていない椅子は私の席だ。だが、逆隣。まるで当たり前の様に座るサディオを見付け、危うく悲鳴を上げそうになった。

死に掛けたのは、昨日だ。

どんな無茶をしたら、この場にいられるのか解らない。今朝見舞った時は、起き上がれもしなかったのだ。それから、数時間しか経ってないのに。

先に立つギサンテが、背を向けたまま囁いた。

「わがままに死ぬ事しか考えなかった男が、あんたのために命を張ると言ってるんだ。好きにさせてやれ」

賭けたのだ。

光の様に、激しい思いが瞬いた。サディオを守るべき側近達までが、彼の命懸けとも言える決意に。

竦む様に止まった私を、手を差し伸べて兄が促す。

「こちらへ」

ギサンテに伴われ、ぴたりと寄り添うセタに守られて足を進める。途中、壁際に控えて礼を取るラウレル親子が見えた。他にも部屋のドア周辺と四隅には、インヴィオの兵士が数人ずつ配されている。

私が席に着き、側近達が所定の位置に散らばったのを確認するとサディオは隣に頷いて見せた。それを受け、アサレアが呼ぶ。

「ラウレル卿、前へ」

「はっ」

私達の正面に進み出たラウレルは膝を突き、口髭と同じく白髪混じりの頭を下げた。

「急に呼び付けて、悪かったねえ」

兄はいつも通り、聞いているこっちの力が抜けてしまいそうな口振りだ。アサレアを初めて見る様なインヴィオの兵士は、何とも妙な表情を浮かべた。

だがさすがに、長年仕えるだけはある。ラウレルは軽く俯く程度まで体を起こし、このまま世間話でも始めそうな主を本題へと導く。

「陛下のお召しとあれば、いつなりと。……しかしこれは、どうした事ですか」

「すまないねえ。今はサディオ殿に、警備をお願いしているんだよ」室内の状況をピリピリと窺うふうのラウレルに、おっとりと答えた。そして、ついでの様に言葉を続ける。

「お前に寝返られたら、動かせる手勢がいなくなつてねえ。さあ、ラウレル。どうして反乱を起こすのか、理由を聞かせてくれないか？」

核心に触れた兄の声に、私は肩の力が抜けるのを感じた。口振りのせいではなく、これを例えるなら安堵に近い。

自分に打てる手は打った。

後は、しっかりと終わらせるだけだ。

(十三)

(十三)

父親の裏切りを知った息子は、蒼白に血の気を失った。ラウレルに向けられるノーチェの眼は、動揺の色しか映していない。

彼はこの件に加担してないと確信し、胸の内ではっと息を吐いた。この国を創り直すには、ノーチェの力が必要だろう。

今にも倒れそうなその姿から視線を戻すと、ラウレル卿は立ち上がってこちらを見ていた。

まるで、私達が糾弾を受けている様だ。いや、もしかすると、あちらはそのつもりだったかも知れない。

「先に大逆を犯したのは、どなたか。身勝手に、祖国を売ったのは！」

打つ様な言葉に、はっとして自分の手を握り締めた。ずっと解らなかった反逆の理由が、少しだけ見えた気がする。

ラウレルもまた、この国を守ろうとしているのではないか。

ただ望む形が、私達とは違うだけで。

「国を守らぬ王は要らぬ。王座を明け渡すがいい、アサレア陛下！我らは新しき王の下、更なる繁栄を切り拓く！」

「売ったつもりは、ないんだけどねえ」

「買った覚えもないな」

「何を呑気に言っているんですか、あなた達は！」

火焰息巻くラウレルとは温度差激しく、隣で交わされる呑気な会話に頭を抱えた。脳天気さとは、うつるものなのだろうか。

ぺろりと舌でも出しそうな調子で、アサレアは話を戻す。

「援軍はこないよ、ラウレル」

「何……？」

「君が金を握らせて掻き集めた二千の傭兵は、こちらで押さえた。」

援軍は、なしだよ」

にっこりと、笑顔さえ見せて告げる。と、サディオが後を継いだ。「腑に落ちないのは、国境に動きの見られない事だった。例えば反乱を支援するのがどの国であろうと、国境を越えず兵を送り込む事はできないにも関わらず」

「かと言って、我が国の軍はインヴィオ軍によって制圧されているからねえ。動かせる兵は、ないはずだった」

だが、いたのだ。

二千の兵が、この王都に。

兄が私を見る。視線を受け、その腕にそっと触れながら私は口を開いた。

「そこで、インヴィオに雇われた傭兵はどうかと考えました。あれは金で動く。しかも戦場はここ。行軍の必要がないから、ギリギリまで反乱の動きにも気付かれ難い。疑えば疑うほど、打って付けの遊軍です」

だがこれは、予測に過ぎない。

確証を得るために、いつだったか川原で私を襲い掛けた傭兵を探し出した。自分達が襲った相手は誰かを知らせ、どれだけ拙い立場にいるのかを教えてやる。そうになると、人の口は幾らでも軽くなる。「それから、大変でしたよ。街中の宿や酒場に内密に御触れを出して、傭兵達を酒で潰してくれる様にお願いしました」

酔い潰してしまえば、いかに戦い慣れた傭兵でも比較的容易く拘束できる。だからこちらが動かした兵は、最小限で済んだ。

敗北を悟らせたはずの私の言葉に、ラウレルは顔を歪めた。だが、そして、声を上げて楽しげに笑った。

「見たか！　どれだけ時間を費やし抜かりなく準備しても、姫は一晚で始末を付けてしまわれる。これが、黒い風だ！」

「お見事」

知らず、震えた。きつと恐怖だ。

気付いた兄が、腕に触れた私の手をそっと押さえる。けれども眼

は、私も、サディオオも、唐突に姿を見せた男に囚われていた。

黒い外套の暗殺者。

それは長い裾を揺らし、入り口から悠々と王の間に足を踏み入れた。

警備兵は何を？

訝しんで視線をずらすと、折り重なって倒れる兵の姿がそこにあった。動かない体の下に、血溜りが広がる。

それを踏み付ける様にバラバラと硬い足音を響かせて、暗殺者の背後から武装した男達が現れた。少なくとも、二十はいる。彼らだけで、部屋のほぼ半分を埋めてしまう。

こちらの警戒を掻い潜り、これだけの私兵を城の中に潜り込ませていたのだ。今更ながらラウレルのその手腕に、内心で舌を巻いた。青い鎧が視界を塞ぐ。側近達が素早く駆け寄り、自らを盾に私達の前方を守ったのだ。

自分に呆れる。その後ろに守られて、まだ恐いとは。冷静な部分がしゃしゃり出て、声が震えないのがせめてもの救いか。

「褒められた話ではないでしょう。せっかく、あなた方が教えて下さった事ですから。これくらいは、やらないと」

「いよいよ、小賢しい」

鼻で笑う。黒いフードに隠されて表情は解らないが、暗殺者の態度は正解を仄めかす。

そうだ。私は、敢えて導かれたのだ。

首謀者は尻尾も見せず、反乱の計画だけははっきりとこちらに伝わってくる。こんな事があるか？　だが、わざと情報を流したなら、有り得る。

当初、暗殺者が私の前に現れ、今回の反乱について洩らす事は計画にはなかったのに違いない。そうせずとも、インヴィオに情報を掴ませば私まで伝わって当然と考えたはずだ。

しかし、そうはならなかった。サディオオが混乱から私を遠ざけたために。

「だからあなたは姿を晒し、私に反乱の情報を伝えなくてはならなかった。でも、何のために？ 知れば必ず、私はこれを止めるのに」
けれども、逆なら？

この反乱は、私に止めさせるために起したのだとしたら？

「黒い風が健在であると。姫がその人であると、証しを立てねばならなんだ」

切っ先が、自分に向いても無頓着に。ラウレルは、まっすぐ私へと腕を伸ばした。

「儂の手をお取りになられよ。姫、あなたさえおられれば、我がトルトゥガリスタはどの列強とでも渡り合える。インヴィオ如きに、隷属する必要などありません」

「それは、お前の考えかい？」

アサレアは私を自分の陰に押し込むと、年老いた臣下に問うた。
それを受け、ラウレルの表情がわずかに動く。

「何を申されたい」

「いやあ、どんな話を吹き込まれたのかと思ってねえ。ラウレル、お前はどこぞの国から支援を受けたのだろうか？ その理由を考えたかい？」

理由なく、敗戦国である我が国に他国がわざわざ味方する訳がない。そして理由になり得るのは、何らかの利益だけだ。

「考えたとも。が、無意味じゃ。あちらの目的が何であろうと、黒い風さえこちらにあればどんな思惑も蹴散らせる。欲を、利用してやればよい」

「甘いよ、ラウレル。確かに、黒い風は優れた軍師だ。でもね、だからこそ有り得ない。予なら、黒い風をトルトゥガリスタに置いたままにはしない」

そうだな、例えば。

アサレアはよく手入れされた指先で、自分の唇を突っつきながら天井を見上げた。まるで、悪戯でも考える様に。

「例えば、馬鹿な王に絶望した臣を甘い言葉でたぶらかして、黒い

風の正体を探るとかね。そして、攫ってしまえばいい。脅威が一つなくなつて、強力な力を得られるからね。一石二鳥だ」

いや、それだけでは済まない。

今更ながら気付いた可能性に、私はサディオの背中へそつと寄つた。

兄の隣に立つ彼は、重症を負っているとは信じられない。だがサディオは柄に手を掛けたまま、まだ剣を抜いていない。恐らく怪我のために、長剣の重みを手では支えていられないのだ。

「安心なされよ、アサレア陛下。姫は、儂がお守り申し上げる」

「いいや、無理だ」

「父上……！」

こちらとあちらの、ちょうど中間。壁を背にしてへたり込むノーチェが、悲鳴の様に声を上げた。けれども父親は、息子の呼び掛けには応えない。応えられない。

鎧を着けない胸板を、背後から長剣が貫いていた。口の端から赤い線がつつと垂れて、顎先から滴る。

それが自身のつま先を濡らす前に、胸から突き出た剣先は背中側に引き抜かれた。と同時に、その体が力なく崩れる。自分の身に起こった事を、ラウレルは理解しただろうか。

血泡を飛ばして咳き込む音は、二、三度で絶えた。

父の元に駆け寄ろうとするノーチェを、インヴィオの兵が二人掛かりで抑え止める。

「死の商人を引き入れた時から、アンタの命は終わっていたのさ」

男の言葉は酷く遠い。他人事のように。悪夢のように。

冷たくすらない。ただひたすらに、男の声には温度がなかった。

(十四)

(十四)

赤く濡れた剣を、男は挑発的に投げて寄こした。ラウレルの血で穢れた剣は、身構えて並ぶ側近達の足元に落ちる。

床に敷き詰められた石と、鍛え上げた鉄がぶつかり、刺す様な鋭い音を立てた。瞬間、黒衣に包まれた男の姿が、視界から消えた。

その事に気付いたのは、私だけだったのだろうか？

ラウレルが用意した私兵達は、彼が死んだ事にも動揺を見せない。剣先をこちらに向けたまま、距離を詰めてにじり寄る。

アサレアは手を振り上げ、非情な合図を味方に送った。天井近くの小窓から、さっと構えられた矢が覗く。幾つも切られた小窓の全てに、兵が身を潜めて部屋の中を狙っているのだ。

……いや、違う。非情なのは、私だ。この様に兵を配したのは、私だった。

「矢を放て！」

どちらに取っても、これが契機となった。

一斉に、混沌で満たされる。矢は雨の様に無数にきらめき、敵兵の体に降り注いだ。苦痛に呻く声と、矢尻の弾かれる高い音。側近達は盾となり、矢の雨を潜り抜けて辿り着いた敵達と激しく競り合っ

って剣を交わした。

けれども私の注意を惹いたのは、その内のどれでもなかった。見失っていた黒い影が、サディオと袖を摺り合わせそうな間近に現れたのだ。全身の血が凍る気がした。

同時に、私の隣にも黒い人影があった。いつの間にと、思うだけ無駄だ。小柄な少女は、一石の腕輪。恐らく、アサレアの予想は正しい。一石は運び屋。人を運ぶのは、きっと主だった仕事の内だ。だが、私なら。

もし自分が他国の王なら、この混乱の内に黒い風を手に入れるだけでなく、紺碧の盾を殺す。インヴィオ軍は、殆ど彼を信奉している。だからこそ、サディオを失えばきつと脆いに違いない。三石は、そのために雇われたのではないか。

私の頭には、その不安しかなかったのに。

「サディオ！」

「下がれ」

焦りと恐怖に、声の上擦る。だがサディオは、不思議に落ち着き払っていた。二人いる死の商人を素早く見比べ、そして迷う事なく自分を狙う暗殺者に背を向けた。

命を捨てたのだ。一瞬の逡巡もなく。

自分の体で庇おうとでも言うのか、サディオの腕がこちらに伸びる。

恐ろしいを通り越すと、腹が立つのだと初めて知った。小さく叫ぶ。

「馬鹿じゃないの！」

その手を擦り抜け、私はくると回って彼の背中側に飛び出した。心臓が、ギクリと跳ねる。影に隠れた男の顔が、呼吸を感じるほど傍にあるのだ。

けれども驚いたのは、あちらも一緒だったらしい。目深に被ったフードのために、表情は影に沈んでいる。だが極めて近くにあるせいで、それが少しだけ見て取れた。

狂気染みている訳でもなく、鳶色の眼は血に酔ったふうでもない。ただこちらを見る瞳が、驚きに見開かれているだけだ。

そうしていたのは数秒だったか、それともっと短い間の事だったのか。

顔を歪めて舌打ちし、男は素手で私の肩を突き飛ばした。何、と思う間もない。私と黒衣の男の間で、何かが起こっていたのは確かだ。水面に石を投げ入れた様に、ぐにやりと空間が歪んで見えた。

波紋の端が、私の胴にわずかに触れる。触れた途端に、体の内か

ら赤く焼けた鉄を押し当てられる様な激しい痛みに襲われた。

「……ッああ！」

言葉にならない苦痛に耐え兼ね、丸まって崩れようとする私の体を誰かの腕が背後から抱き止める。

私とたなびく黒衣の間を、セタの剣が一閃して掻く。

剣先に裂かれるよりも一瞬速く退いた体を、しかし暗殺者は持て余して片膝を突いた。溺れる様に咳き込んで、口元から離れた手が血で濡れている。

あの一瞬、私に触れたのはわずかだった。だがその波紋の様なものの本体は、私の手間で跳ね返る様な動きを見せて暗殺者の胸へ戻ったのだ。わずかに触れてこれほどの苦しみならば、本体を食らって無事のはずがない。

セタが私達を背中で押して下がらせると、視界の端から飛び出した黒い塊が三石の男に跳び付くのは、ほぼ同時だった。

はっとして、一石の少女と対していたはずのサディオを探す。だが少しばかり動こうとするだけで増す痛みに、呻き声を上げてしまった。と、背後から私を抱き止める腕がそっと位置を変え、上向きに顎を取られた。

青い瞳が不機嫌そうに、こちらを覗き込む。

「運がよかっただけだぞ」

私の命が取られなかったのは。

そしてサディオが言ったのは、こう言う意味だったと思う。深海の眼は再び離れ、黒衣の二人を見遣っていた。

剣を彼らに向けたまま、セタが口を開く。

「術を途中で止めたのでしょうか。以前、一度だけ、ああして死んだ死の商人を見た事があります」

振り下ろした剣を止めるのが容易でない様に、あの不思議な力を止める事も簡単ではないのかも知れない。理屈はやはり、よく解らないが。

三石の暗殺者は、あの、サディオが背を向けた一瞬で彼を殺すは

ずだったのだ。

不思議な力が標的に届く前に、しかし私が割って入った。黒い風を殺してはならないとでも、命じられていたかも知れない。そのために止めた自らの力が、暗殺者の身を蝕んでいると言う事か。

黒衣の暗殺者はおびただしい血を吐いて、呼吸すらままならない。苦しみながら男は、自分を心配する少女を力任せに突き放す。だが何度床に突き倒されても、少女は男の傍から離れようとはしなかった。

何度か目に倒されて、外れたフードが少女の外套の肩に落ちる。そうして露わになった顔に、息を呑んだ。

似ていると思ったのだ。三石の男と、少女の持つ鳶色の眼が。

その眼からぼろぼろと涙を零して、取り縋る少女は男の何だ。年齢から考えれば、妹と見るのが近いだろうか。

胸を突かれた。

どうしてこんな簡単な事も、私には解らない。

眼を転じれば、ほぼ勝負は付き掛けていた。インヴィオの側には増援が駆け付け、ラウレルの招き入れた私兵達を殺し尽くそうとする所だ。

屍から流れ出た血が、床に刻まれた模様を鮮やかに浮び上がらせる。敷石のそれは、血抜きのための溝だ。足元を血で溢れさせないため、施された工夫なのだ。

その理由は知っていても、実際に眼にするのとはまるで違う。知らなかった。美しくさえあるその図柄が、隅々にまで血を通わせる。とこれほど陰惨な姿に変わるとは。

まるで物の様に、折り重なった死体達。その一人一人に名前があると、忘れてはいなかったか。

それらは全て、誰かに取っては、大事な誰か。

なのに駒で争うゲームの様に、遣り取りした命の数を覚えてもいない。

解ってはいなかった。

守るつもりで、殺したのは私ではないか。

叫びたいのに、喉が張り付いた様に声が出ない。視界一杯を埋め尽くす死体が、ただその存在だけで私を打ちのめした。

「予を恨め」

すぐ傍で、兄の声。

「これを招いたのは、予だ。アルセの才を利用し、罪を負わせたのもね」

だから忘れてしまえばいいと、アサレアの姿が視界を塞ぐ。そして、思い出した。

鼻を衝く粘ついた血の臭いも、断末魔の混じる戦いの音も。十一年前に体験した反乱で、私は知っていた。けれども、眼にしてはいなかったのだ。

思い出せるのは、美しい絹の文目だけ。

いつだってこうして、守られていたからだ。私はただ兄の腕の中、胸に眼を伏せていただけだった。

生きるため。

戦わなければ、兄も私も死んでいた。そして私にできたのは剣を取る事でなく、多くの敵を殺すために作戦を立てる事だった。

十一年経って、大きな失敗を犯している事に私達は気付いた。人は財産。振り向けば今すぐそこにある、王座に刻まれた一文を受け継ぎ損ねた。

代わりに、兄と私は叔父の始めた殺戮の歴史を継いだのではないか。

黒い風が軍事的な意味で国力の象徴となって、この国は屍の上に成り立つ国になってしまった。父の頃には、人を守り育てる国だったはずが。

この流れを絶つには、一度壊してしまわなければならなかった。故国と、そこに住まう人の意識を。

そのために、今回の戦乱を始めたのだ。

——けれどもきつと、兄には違った。

命を奪う。その意味さえ本当には知らない私を。罪に気付く前に、遠ざけようとしたのだ。

兄が国を壊す決意をしたのは、私を自由にするためだった。

(十五)

(十五)

「どうも、弱いねえ」

後で幾ら考えても呆れた事に、兄はその一言で死の商人を解放してしまった。

仲のよい兄と妹には弱いなどと笑っているのを問い詰めると、裏とも言えない裏があった。怪しげな兄妹に国境を越えて貰えば、目暗ましになるだろうと言うのだ。

その程度で暗む目なら、あんなふうに裏を掻かれはしなかったろうに。

ラウレルの死は、影を落とした。けれども決意を、強くもさせた。「父の汚名を雪ぎ、国の礎となれ」

叱責の代わりに掛けられた言葉を、最初ノーチェは理解できなかったそう。それはそうだろう。反逆者の息子が、王から国の執政を任されたのだ。

しかも、アサレアは死んだ。いや、本当には死んでいない。死んだ事になった。

だから実質、国を動かすのはノーチェだ。

これは最初から決めていた。王族の血に固執する感のラウレルは共和制に反対すると解っていたし、他に頼れる臣に心当たりはなかった。

死んだ事になった兄と、ついでに私は、密かに国外へと逃亡した。ここで例の兄妹の話に戻るのだが、本当に目暗ましになったかは確かめる術がない。

これらの話を、私はずっと後になって聞かされたからだ。

血に中てられたか、それとも精神的なものか。死の商人の不思議な術が、それほど深いダメージを残したか。あの場で気を失ったとき

り、ひと月近くも寝付いてしまっていた。

次に意識を取り戻したら、そこはすでに馴染みない外国。しかも匿われているのは、サディオの屋敷だ。

「信じられない」

呟くと、その思いは強くなった。

だが、疑いたくもなる。部屋一杯の血と死体に囲まれていたのは、ついさっきだった気さえする。それが今は足元に犬を遊ばせて、呑気に昼寝などしているのだ。

いや、実は犬ではない。遊んでもいない。ベッドに掛かる上等なシーツの上で、狼に姿を変えたサディオが丸まっているだけだ。

その重みと温もりが、シーツ越しにじわりと足へ伝わってくる。

私の呟きは、そのピンと立った両耳に届いていたらしい。白金の毛並みの中に青い眼を片方だけ開き、ベッドの表面を叩く様に尻尾を数回振って見せた。

そんな姿を見ていたら、気が抜けてしまう。獣に向かい、両手を広げる。

「おいで」

声に応じて立ち上がった狼は、体を私の腕の中に滑り込ませた。柔らかな毛並みをそのまま抱き締めようとしたが、しかしサディオは体重を全部こちらに任せた。これは重い。支え切れず、押し倒される形になった。

まるでにやりと笑う様な獣の姿を、きょとんとして下から見る。

彼は一度シーツの中に潜り込み、再びもぞもぞと顔を出す。

現れた顔を見るなり、私はその体をシーツごと思い切り突き飛ばした。

「し……信じられない！」

重い音を立ててベッドから落ちたサディオは、シーツに半身を隠しながら頭を押さえて起き上がる。狼ではなく、人の姿で。

今度は気のせいではなく、本当ににやりと笑って見せる。

「そっちが誘った」

「誘ってません！ 人のベッドで裸になるなんて、どうかしてます」
「さっきから裸だったぞ、俺は」

「人と狼の姿では、意味がまるで違います！」
頬が熱い。赤くなっているかも知れない。まっすぐに見るサディオの視線がからかう様で、私は唇を尖らせて顔を背けた。

ローブに袖を通してながらベッドを降りると、ドアに向う。

「服を探してきます」

宣言して扉を開くと、男物の服と靴の一式がずいっと胸元に押し付けられた。

「師団長のお召し物です」

「……どうも」

無表情とも思えたが、目の前のパパはどこか「その内こうなると思ってたました」とでも言う様に服を差し出す。その隣には、声を殺して爆笑するコルロハがいた。

彼らの態度に何か釈然としないものを覚えたが、巧く言葉にできずに引き下がる。

首を傾げながら踵を返すと、同じに首を傾げるサディオと眼が合う。一拍置いて、二人同時に小さく笑った。

「痛みますか？」

着替えを手伝っていると、まだ服に隠されない上半身に真新しい傷が見える。私を庇い、負った傷だ。

引き攣れながらも薄い皮膚で塞がっていたが、その部分は赤味を帯びて、今も触れると血が溢れそうだ。

「冷えると、少しな」

「あ、そうですね」

慌てて、サディオにシャツを被せる。彼が袖を通す間に、ボタンを一つ一つはめて行く。最後のボタンから手が離れると、袖に通った男の人の両腕に抱き締められた。

近付いてくる唇を、厚い胸に額を押し当てて避ける。

「嫌か」

「……どうすればいいのか」
解らない。

多くを殺した私達が、生きる権利はあるのだろうか。大事な誰かを奪った私が、幸せになんかなれるのだろうか。

嫌かどうかなんて考える前に、そんな事が頭を一杯にしてしまう。

「俺もお前も、多くを殺した」

痛い言葉を、敢えて言う。

私をベッドに座らせて、サディオは隣に腰掛けた。

「確かにそうだ。だが逆に、守りもしたぞ。何のために戦った。何のために苦しんだ。自国の民であり、他国の民のためではないのか。お前は、自分を守るものを選んだだけだ」

「あなたも？」

「いいや。俺はただ、……許されたかった」

声にして、自分でも初めて解ったと言うふうに、サディオは握った手を自らの口元に当てた。その手を膝の上に落とし、祈る様に指を絡めて両の手を組む。

「そうなのだな、きつと。神の落とし子と祭られても、誰にも必要とされない命だ。俺には、いい場所などどこにもなかった。せめて全てを尽くして国のために……。——いや、何かを守った末に死ねば、気分がいいだろうと思ったのかもな」

でもそれは、余りに寂しい。

彼の手に触れると、ふと、自嘲とは違う笑みが表情に浮かんだ。

「だが急に、惜しくなった。お前に会って」

「私に？」

「自分の命を惜しんでもよいのだと、初めて思った。お前が、俺を惜しんだからな」

大事な誰かの、大事な自分。

「だからお前も、自分を惜しめ」

「わ、私？ 私に死にたがってなんか……」

「生きたがっている様にも見えないぞ。そうしてはいけないと、思

い込んでいるのか？ 殺した者が、生きたがってはならないと？
自分には、価値がないと？」

畳み掛ける様なサディオの言葉に、反論が見付からず口を噤んだ。
そこまで考えた事はないが、そうではないとも言切れなかった。
奪った者が奪われるのは道理ではないかと、心のどこかで思っている。

「今は、戦う事は命を惜しむ事だとも思う。奪うのではない。守る事だと思え」

「詭弁です」

「何でもいい。信じてみないか」

サディオの大きな手が、私の頬をそっと包んだ。

「信じて、生きて欲しい。お前がいれば、俺が生きて行ける様に」
こちらを見詰める深く青い瞳の中には、まるで熱が宿るかの様だ。
「……何だか、求婚でも受けている気分です」

「いや、そう申し入れている。その様に聞こえなかったか？」
難しいものだな、と口元を押さえて考え込む。その横顔を、私は複雑な気持ちで見詰めた。

求婚と言うより、脅しに近い。

自分の命を人質に、婚姻を迫ると言う話は聞いた事もない。

呆れた話だが、でも、と思う。

でも、この人を失うのは嫌だな。

「ちょっといいですか？」

「邪魔だ」

余程慌てていたのか、ノックもなしにドアが開いてギサンテが顔を覗かせる。即座に返された邪険な言葉を全く意に介す様子もなく、ひょいっと頸を伸ばして私に向けて手招きした。

「あんたの兄貴が吟遊詩人になるつって旅支度してんだけどさ、いいのか？」

「止めて下さい！」

私は飛び上がる勢いで立ち上がり、「ああ、やっぱり？」などと

呑気なギサンテに駆け寄った。

まさか、本気とは。

兄は夢見る様にそんな事を言いながら、ギターと呼ばれる弦楽器をここ数日掻き鳴らしてはいたのだ。だがその演奏も酷いが、歌も酷い。音楽で世を渡る吟遊詩人など、とても無理だ。

部屋を出て行こうとドアを潜り掛けて、ふと足を止める。振り返って、手を伸ばした。

「一緒に、きて下さらないんですか？」

「行こう」

差し出した手をぎゅっと握って、サディオが少し先を歩く。

歩こうとした。だがすぐに足を止め、不思議そうにこちらを見る。私が、動こうとしなかったからだ。

足を進められなかったのは、繋がれた自分達の手から眼を離せず にいたから。頭の中に湧き起こったのは、呆れるのに近い気持ち。

自分達の手と、訝しげなサディオの顔を見比べて、それから周囲を確かめる。兄の所へ駆け付けたらしく、部屋の外にも側近達の姿はない。

二人きりなのを確認すると、私はサディオに、ひざまずいて欲しいと頼んだ。

「どうして」

「求婚する時は、ひざまずくものです」

一瞬奇妙な顔をして、それからサディオは膝を折った。

「求婚、ね。気が変わったか？」

さっきは口付けも拒んだのに、と。半分はからかって、半分は心配そうにこちらを見詰める。

やっと、気付いた。

もうとつくに、この心はサディオのものじゃないか。

求められれば恐がるくせに、自分からは身勝手なくらい甘えている。手を握られたら、離したくない。同じ部屋にいるだけじゃなく、体温を感じるくらい近くにいたい。

生きるなら、一緒がいい。

ゆっくりと身を屈め、そよ風のように私は囁く。

「あなたがいないと、私はもう駄目みたいです」

深海に似た瞳の中に、星の輝きを見た気がする。その瞳で、驚くほどに優しく笑う。

傳く男は永遠めいて、熱っぽい唇で私に触れた。

（傳く犬のために泣け／了）

無断転載不可

Copyright (C) 2009 mikumo / 1979.
All rights reserved.

(十五) (後書き)

最後まで読んで下さって、ありがとうございました！
ご指摘などを頂けましたら、幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5682j/>

傳く犬のために泣け

2010年10月8日10時46分発行